

---

# 郵便屋 -死者の声届けます-

藍崎どーなつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

郵便屋 - 死者の声届けます -

### 【Nコード】

N4472X

### 【作者名】

藍崎どーなつ

### 【あらすじ】

家の郵便受けを覗いてみたときに「郵便屋」の判子が押された手紙が届いていることがあるかもしれない。その手紙の内容は世間話だったり怨念だったり恋慕だったり様々だが、共通して言えることは、その手紙の差出人が皆「死者」であることだ。

「天国からの手紙なんて、そんな良いもんじゃないよ」  
郵便屋の少年は今日も業務に励んでいる。

## 郵便屋です

「いらっしゃい」

街の中のビルとビルの間。その小さな道を通り抜けて右に曲がるとその店はある。

「代筆ですか？配達？」

それとも両方？」

店、というのも妙な感じがするぐらいに小さなその建物には、若干色褪せている「郵便屋」と言う看板がかかっていた。

その店主は年齢的には中学生ぐらいの少年で、紺色のパーカーを着て、そのフードを目が隠れる程度に深く被っている。

そう、彼の仕事は郵便屋だ。

ただし、商売相手は「生きている」「人間ではなく」「死んだ」「人間である。」

「お代はいかがいたしますか。」

現金？物品？魂の一部？」

少年は今日も業務に励んでいた。

## 郵便屋の仕事（1）（前書き）

はじめまして。

藍崎どーなつと申します。

読みにくい文章となっています。ごめんなさい。  
がんばって書きますので、よろしくお願いします。

## 郵便屋の仕事(1)

「……はあ」

握り締めていたペンを置き、一息つく。

後一文で今日の依頼は終了だ。気合を入れなおす。

「この場所にありますから、大切に使うてください。これからも元気です」

もう一度ペンを握りなおして、最後の一文を書き終わると、今度こそペンを放り投げた。

これは、僕の仕事だ。

手紙の代筆をして、頼まれた住所まで配達。あと、依頼があればその後の「送り先」の経過の報告をすることもある。

まっとうな職なんかじゃない。

というよりも、依頼人が「死んだ」人間では、まっとうも何もないだろう。

「もう書き終わったんですか？」

さっきまでどこかに行っていたはずの今日の依頼人がいつのまに帰ってきたのか、僕の手元にある紙を覗き込んだ。

「終わりましたよ。今日はもう遅いので、配達は明日でいいですか？」

「かまいません。急ぎではありませんから」

長い髪を低いところで束ねた30代ぐらいの女性が、苦笑いを浮かべて部屋を浮遊している。

「事後報告はありますか？」

「いえ、必要ないです。」

私が突然死んでしまったものですから、残った主人と娘が心配だったからです」

女性は、さらに苦笑いの「苦い」の部分が強めて笑った。

僕はその様子を気にすることもなく、背後の戸棚から真っ青な封筒を取り出して宛名と差出人を書き込む。

「宛名は田村健二様、差出人田村鈴子……で、間違いありませんよね？」

最終確認のようにたずねると、女性……田村さんはしっかりとうなずいた。

「では、間違いなく」

宛名と差出人を書き込んだ封筒に80円切手を貼り付け、「郵便屋」と書かれた判子を押す。

「明日の正午にはお届けしますので、気になるようだったら直接見に行ってください」

客相手に礼儀の無い態度だという自覚はあるが、直すつもりも無いので素っ気無くそう言っていると、田村さんの目を覗き込んだ。

彼女は気にした様子もなく、『ありがとう』と言って笑うとふっと消えていなくなった。

時刻は真夜中の1時。

僕は大きく伸びをしてからそのまま畳に寝転んでそばにある布団を手繰り寄せる。

電気はつけっぱなしで目を閉じた。

基本的に、僕の睡眠時間は「一般の人」と比べると極端に短い。

何故なら僕のお客さんは、時間なんて気にすることもなく店に入ってくるからだ。

自分たちもついこの間まで生きていただろうに、死んでしまっただけの存在になって、眠る必要がなくなった途端、時間の感覚がなくなるらしい。

いい迷惑だ。でも、仕事だから仕方がない。

「……いらつしゃい」

気配を感じて目を開けると、既に次のお客さんがお待ちかねだった。

本日の睡眠時間1時間。明日まとめて配達に行つて、帰つて寝よう。

明日も中学校は行けそうに無いな。行くつもりもないけど。

「代筆ですか？」

茶髪の髪にゆるくパーマをかけ、短いスカートにサンダル姿の若い女性が小さくうなずいた。

『彼氏に、手紙を』

「代償のお支払方法はいかがなさいますか？」

『……魂で』

「かしこまりました」

きつと、この人は死んだばかりなんだろう。

近くにいた「同類」に僕のことを聞いたのかもしれない。

「魂」で、という声に、若干の抵抗が見られた。

「では、お手紙の内容をお伺いしますので、書きたいことを全部しゃべってください」

『……全部？』

「はい。覚えますから」

女性は、少しうるたえたようだが、小さな声で手紙の内容をしゃべりだした。

「では、以上でよろしいですか？」

『はい』

女性の言った手紙の内容は、一般的な恋人に向けた別れの手紙だった。

ありきたりだなー、なんて失礼な感想を抱きながら、僕は次の言葉をつむぐ。

「それでは、先に代償を頂戴いたしますね」

僕のその言葉に、女性が見るからに緊張した面持ちに変わった。きつと「魂で支払い」という未知のものに恐怖を抱いているんだろうな。

それに気づいてはいたけれど、僕は気にせず指を女性に向けた。

時間にして、一秒にも満たない。

魂の回収は終了する。

「はい、ありがとございました」

『え、もう終わりですか？』

案の定、女性は拍子抜けしたように目を瞬かせていた。

僕は、少しだけ苦笑いを浮かべる。

といつても、目元までフードで隠しているので、ほとんど表情は見えていないだろうけど。

「はい。終わりです」

『……簡単なんですね。魂で支払いって言うから……』

「簡単ですけど、魂で支払いってことは「この世にいられる時間を縮めていますから、あんまり魂ばかり支払いしていると、消え去ってしまいますよ」

僕にはおせっかいなその言葉を彼女に投げかけたのは、手紙の締めの記事が、いかにもまた手紙を書きます、と言ったものだったからだ。

魂で支払い、ということとは、生きている人間で言う「寿命」で売買をしていることに等しい。

『肝に銘じておきます』

女性はここに来てようやくゆるく笑った。

「では、僕は今から書きますので、ここにいてもらっても結構ですし、どこかに出かけていただいてもかまいません」

『あ、はい。よろしく願います』

女性は、また小さく頭を下げると、ごく丁寧にドアをすり抜けて出て行った。

僕は独りになった室内で、ペンを握り締めた。

郵便屋の仕事(1)(後書き)

11月19日 少し修正しました。

## 郵便屋の仕事(2)

手紙の代筆が一通り終わり、大きく伸びをして時計をちらりと見やった。

2時30分。依頼人がやってきてから30分近く経過している。

まあ、15分程度で書き終わったし、上等じゃないかななんてこと考えて、ふと顔を上げると依頼人の女性が浮かんでいた。

『字、綺麗なんですわね』

多分、純粹に褒められているんだと思うけど、僕は淡々とした口調で「それが商売ですから」と返す。

「では、明日の昼時にお届けします」

『よろしくお願ひします』

女性はぺこりと頭を下げた。

最近の依頼人はなんだか礼儀正しい人が多いな。

少し前まではふてぶてしい態度で「もっと早く届けられないのか」とか言うやつ、結構いたのに。

僕は少しだけいい気分で、宛名と差出人を再確認する。

「宛名は杉原太一様、差出人は横間理穂、でよろしかったですか」

『はい』

女性もとい横間さんがうなずくのと同時に、僕はまた青い封筒にさらさらと名前を書き入れ、切手を張り、判子を押した。

「で、事後報告は必要ですか？」

『事後報告……ですか？』

僕の質問に、横間さんは首をひねる。

どうやら、そこまで詳しくは無かったようだ。

僕にしては丁寧の説明することにする。

「手紙を確かに手渡したという証明をするサービスです」

丁寧に説明したつもりだったけれど、いつもと変わらなかった。

『……それって、何か意味あるんですか？』

横間さんが首をかしげている。

確かに、この業務にあまり意味は無い。

霊になってしまえば、一部例外を除いて、壁も何も関係なくすり抜け、ものを見ることが出来る。

自分で生きている人間に意思を伝えることはできなくても、僕が手紙をきちんと渡したかなど、確かめることは容易だ。

この事後報告の意味は、他にある。

でも、きつとこの女性には必要ないだろう。

「まあ、しいて言えば、その証明で依頼人との正しい信頼関係を築くためですかね」

『……はあ。そうなんですか』

だから僕は適当な理由を述べて、彼女もそれで納得したようだった。

『じゃあ、必要ないです。郵便屋さんのこと信用してますし、信用がなければ自分で見に行けば言いだけのことですしね』

横間さんはやはりそう言っって、『では、よろしくお願いします』ともう一度頭を下げた。

「……寝るか」

再び僕独りとなった部屋の畳の上に寝転がり、もう一度布団にもぐりこむ。

このまま依頼人が来なければ、昼まで寝ていることにしよう。

田村さんの手紙の相手は、割とこの近くにすんでいるから、11時に出れば昼前に間に合うだろうか。

横間さんの方は、電車を使わないとな。

そんなことを考えている途中で、僕の思考は完全に停止し、深い眠りについた。

翌朝（といっても、「翌」ではないし、起きたのも「朝」とは呼

べない時間帯だが)、僕は二つの手紙をかばんに入れて、店を出た。きつちりと「鍵」をかけて、配達中の看板をかけ、歩き出す。

確かに、霊は鍵も壁もすり抜けられるけれど、あの店の「鍵」は特殊だから、僕が外出中に店に入ることにはできないし、普通の人間はあの店に気づかないから、泥棒に入られることも無いだろう。

そもそも、人間が入ったところで金目のものは何一つおいてないし、霊が入ったところで彼らは物理的にものに影響を及ぼすことができないのだから、嚴重すぎる「鍵」かも知れないけれど。

そんなことを考えながら、フードを深くかぶりなおした。

こんな奇異な格好だから、人にじろじろ見られることは多々ある。でも、僕は気にすることをしない。

声をかけられるわけじゃないし、ましてや通りすがりにフードを引つ張つて脱がすような常識はずれな人間もない。

自分からこんな怪しい人間に近寄っていく変わり者なんて、そうそういない。

だから、この目元まで隠したフードの少年ぐらい、時間がたてば忘れられるだろうと考えている。

世の中には、もつと奇抜な格好をした人間がごまんといふのだし。  
「2・35…ここか」

田村さんの住所は難なく発見することが出来たので、迷いなく据え付けの郵便受けに青い封筒を入れた。

その音に気づいたのか、依頼人の夫と思われる男性が出てくる。

僕は少しだけ足早にその場を離れ、手紙を手を取った男性の様子をちらりと伺った。

どうやら、イタズラか何かだと思って少し憤慨したように、眉を寄せている。

そりゃ、そうだろうな。

死んだ人間から手紙なんて、普通あり得ないし。

それから男性が手紙を信じようが破り捨てようが、僕には関係のないことなので、次の住所を目指してその場を後にした。

### 郵便屋の仕事(3)

カタンカタンと電車が心地よく揺れる。

横間さんが指定した住所はあと1つ駅を通過したところの最寄だ。しばらくの間、することもなさそうなので景色を見つめてみる。

吊革につかまりながらぼんやりしていると、車内に何やら「怨念」をぶつけようとしている男性の霊を発見した。

「……こんな人の多いところでやらなくたって」

僕はポツリと呟いてから小さくため息をつく。

無視しようかとも思ったが、余波がこっちに回ってきて気分が悪くなるようなことにはなりたくないの、今のうちに破壊しておくことにする。

ちょうど、電車が停車し、人が移動を始めた。

どさくさにまぎれて、その霊に近寄り、肩を小さく叩く。

すると、その霊は怨念だけを残して消え去る。

後は「怨念」を回収し、霧散させるだけ。

「……」

それが終わると、僕はさっきの場所に帰ってまた吊革につかまった。

霊の呪い、というものは大半が勘違いだ。

何故なら、霊は人間に物理的な攻撃ができないからだ。

ものが突然飛んできたり、霊が人を消したり、そういうことは、

大抵の場合違う理由がある。

だけれど、怨念というものは確かに存在している。

それは死んだ人の思いの塊で、それをぶつけられると頭痛がしたりするなど、体調が悪くなる。

もちろん、ぶつけられたって何も感じない人間もいるけれど、感受性の豊かな人間は自分に向けられた怨念でなくとも体調に異常を

きたすらしい。

これは師匠の言っていた言葉なので、僕は本当かどうか知らないけれど、怨念が存在しているというのは事実だ。

そして僕は霊とともにその怨念を見ることができ、またその怨念は「触れるもの」が触ると簡単に霧散してしまう代物なので、僕は自分が巻き込まれる前に霧散させることにしている。

「……駅に到着いたします。お忘れ物などございませんよう気を付けて……」

と、ぼんやりしている間に次の駅に到着していた。

僕はフードを今一度深くかぶりなおし、電車から降りる。

改札口を出て、僕は住所と地図を記憶から引っ張り出し、そちらの方へ歩き出した。

土地勘はあるわけではないが、筋金入りの方向音痴というわけでもないの、地図さえあればそれなりに歩き回ることぐらいできる。僕は時折電柱に貼り付けられた「ここは3丁目です」という文字を見ながら歩いた。

「……ここか」

見上げると、それなりの大きさのアパートがある。

一般的な独り暮らしの大学生や高校生は住めないぐらいの大きさはあった。

横間さんが社会人だったんだから、彼も社会人である場合が多いだろう。

僕は特別何も考えることなくアパートに近づき、郵便受けを探した。

「305……305……」

集合住宅らしく、101から609までの郵便受けがずらりと並んでいて、僕は少しだけ気が滅入った。

そして、ようやく305の郵便受けに手紙を入れ、今日の業務は

終了と伸びをすると、後ろに人の気配を感じた。

これは霊じゃない。生きた人間だ。

このこのアパートの住人が帰ってきたのかな、と、僕は特別深く考えるでもなく振り返り、歩き出す。

スーツを身に着けた男性は、仕事帰りなのか手にコンビニの袋をぶら下げていて、まだ昼時なのに早い帰宅だな、と僕は他人事のよう思った。

「……君、今305の郵便受けに何かしてただろ」

その男性に話しかけられるまでは。

「そこは僕の部屋の郵便受けだ」

そして、気づく。彼が依頼人の恋人の杉原太一であると。

厄介だな、と心の中で毒づいた。宛先の人物に会って、良かった経験なんて今まで一度も無い。

「何かいたずらでもしていたのか？中学生だろう。学校はどうした」  
どうやら、横間さんの恋人は、まじめな社会人のようだ。

確かに、僕のこの格好を見たら怪しむとは思うけれど。何せ目までフードで覆っているし。

何か悪さをしていて、そのために顔を隠していると勘違いされても仕方がない。

「何か言ったらどうなんだ」

「近所のことも考えてか、彼の声は少し小さめで、だけど声に迫力があつた。」

「……頼まれたことをやっていただけですけど」

本当は頼まれた、というよりこれが僕の仕事なのだけけど。

そんなこと教えてもどうにもならないのでそういうことにしておく。

「頼まれた？誰に？」

どうやら、使い走りだと勘違いされたようで、彼は眉を寄せた。

もともと釣り目のようだが、さらに目が釣りあがっている。

「横間理穂さんに」

そして、僕が正直に答えると、彼は目を見開く。  
その隙に僕は走り出した。全速力で。

「こら、待て！ふざけるな！」  
慌てて彼も追いかけてくる。

やっぱり驚かせて逃げようというのは計画として杜撰すぎたらしく、普段運動をしない僕はすぐにつかまった。

逃げ切れるとは思っていなかったけれど、近くにある人がいない公園まで引っ張っていかれるとは予想外で、僕は心の中で舌打ちをする。

パーカーの袖をつかまれて、所謂強制連行という感じでベンチに座るように促された。

「どういうつもりだ」

「何がですか」

「何故彼女の名前を知っているのかと聞いているんだ！」

彼は、そう怒鳴って僕の方を睨む。

「本人に聞いたからですよ」

「はあ？」

「だから、本人に聞いたんです。彼女の名前も、貴方の住所も」

僕は平坦な口調で淡々と事実を告げた。

だが、もちろんそんな話が信じてもらえるわけではなく、「だからふざけるなって言ってるだろ！」とまた耳元で怒鳴られる。

「彼女は死んだんだよ！2週間前に」

「知っています」

「お前、」

「貴方が認めようが認めまいが、関係ありません。」

僕は、彼女から頼まれたんです」

彼は怪訝な表情で僕を見て、僕は下を見ていた顔を上げた。

「郵便受けに入れた手紙、僕を怒鳴る暇があったら読んでください」  
そう言って立ち上がる。

「おい、待て」

「その手紙を読んでも言いたいことがあるのなら、聞きますよ」  
僕はそれだけ言って、歩き出した。

彼は、僕の言葉の信憑性を疑っているのか、つかみかかって怒鳴ることはもうしなかった。

## 郵便屋の仕事(4) (前書き)

誤字脱字などありましたら、教えていただけると助かります。

## 郵便屋の仕事(4)

『あの……郵便屋さん』

杉原さんを置いて家に帰ろうと歩き出し、暗い路地に入ったところで僕は女性に話しかけられた。

「ああ、横間さんでしたか」

そこに立っていたのは、おそらくさっきのやり取りを見ていたであろう彼の恋人で、

『……なんで、あんなこと言っただんですか？』

「あんなこと？」

人気の無い道だから、何の躊躇もなく彼女と会話ができる。きつと、横間さんもそれを狙って話しかけてきたんだろう。

彼女は、少し口ごもりながらも僕に尋ねる。

『私に、頼まれてやったって、なんでそんなことを？』

「だって、事実じゃないですか」

『でも……』

眉をひそめている彼女。正直、そんな顔をしたのは僕のほうだ。「何か間違ったことがありますか？」

『いえ……そういう訳じゃ。』

でも、太一私が死んで間もないのに、私に頼まれたなんて言われたら戸惑うんじゃないかって……』

「じゃあ、何で手紙なんて書いたんです？」

『え？』

口調は変わっていないつもりだ。でも、内心はともいらいらしている。

「あの人宛に手紙書いたじゃないですか。

死んだ恋人から手紙が来たって、同じことですよ。

それに、あの場でああ言わなかったら、僕は下手したら警察署に連れて行かれてますからね。

そんなことはごめんです」

『……そうですよ。ごめんなさい』

横間さんは、深々と頭を下げ、消えた。

店に帰ると、まず「配達中」の看板をはずし、一緒に鍵もはずした。

すぐさま倒れこむように畳に寝転がり、布団を頭からかぶる。

「……」

寝ようと思ったが、思いの外頭がさえてしまい、電車で霊を「消した」せいだということに気づく。

内心舌打ちをして、だけど起き上がるのも面倒に思えてそのまま思考だけ働かせた。

「……恋人、ねえ」

残念ながら人生経験の浅い僕にはそんなものは存在したこともないし、ついでに言えばこれから先も存在することは無いだろう。

僕が接している人間は「生きている」人よりも、明らかに「死んだ」人のほうが多い。

学校にも必要なときしか行かないし。

先生たちも、それで納得している（師匠にさせられた）し。

つまり、生きた人間とのかかわりが薄い僕には恋愛感情がわからないから、彼が横間さんの名前が出てきてあんなに怒った理由も、彼女が杉原さんに余計な事を言ったように見えた僕を責めた理由も、わからない。

「そんなに、大切なものなのか」

結局は赤の他人なのに。

血のつながりも無いのに。

「……わからない」

口に出していったら、余計にわからなくなったような気がして、僕は考えることをやめた。

『こんばんは……』

「……いらつしゃいませ」

どうやら、結局僕は眠ってしまったようだ。

ふと目を覚ますと、横間さんが僕の顔を覗き込んでいた（といっても、フードはかぶったままなので僕の目は相変わらず見えていないけど）。

僕は少しだけ驚く。

今日は来ないだろうと思っていたから。

『昼間はすみませんでした』

彼女はまた深々と頭を下げた。

「いえ、よくあることですから」

僕は何も考えずに本当のことを答える。

『あんな失礼なことを言ってしまった……』

だが、彼女は僕が社交辞令を返したんだと思ったようで、また深々と頭を下げる。

あまり、人に謝られなれていない僕は、頭を掻いてから「本当に気にしてませんから」とだけ告げた。

「もっと壮絶な文句を言われてことだって、何度もありますし。」

こちらこそ、気が利いたことが言えなくてすみません」

だから、これでお相子にしましょう。

そう言うと、彼女はようやく弱弱しくうなずいた。

「手紙、今日も書きますか？」

『……実は、そのことなんですけれど』

「？」

僕は仕事をしようとペンを持ち上げかけたが、彼女が言いよどむので顔を上げる。

『手紙、書くべきなんでしょうか？』

「……」

そんなことを言われても。

僕は心底悩んでいる様子の横間さんを目を剥いて見上げた（とい

つても、彼女には顔を上げたようにしか見えていないだろうけど。『あの後、私の手紙を見た彼の様子を伺っていたら、私がやっていることって間違ってるんじゃないかなって……』

そんなことを言われても。

返す言葉を見つけることができず、僕は黙ったままで横間さんの言葉を聞いている。

『彼、泣いてたんです……』

「……はあ」

あんな剣幕で「嘘をつくな」と叫んでいた男性が泣いていたのか。それは見てみたいものだったな、と、場違いなことを考えながら彼女に先を促す。

『悲しませるつもりは無いんです。』

ただ……先に死んだことを謝りたかったんです』

確かに、彼女の手紙は謝罪の言葉が他の人よりも多かった。

僕はそれを思い出してうなずく。

『でも、言いたいことがいっぱいになっちゃって、ついついまた手紙書きます、なんて書いてもらってしまったんですけど……』

私の存在が、彼の今後の生活の邪魔になってしまっているのなら、もう書かないほうがいいんじゃないかなって。

彼女はそれだけ言うと、うつむく。

僕は再び言葉に困って頭を掻いた。

気の利いた言葉も見つからず、仕方がないので、思ったことをぶちまけてしまうことにする。

「そんな風に言うなら、最初から手紙なんて書かなきゃ良かったじゃないですか」

『え？』

「杉原さんの今後の生活の邪魔になんて、一通目を書いた時点ですってますよ。今更です」

『……そうですよね』

僕の言葉に、横間さんは目に見えて落ち込んだようだった。

その様子が可哀想になった訳では無いけれど、僕は先を続ける。  
「きつと、彼は貴方の次の手紙を待っていますよ。」

泣いていたってことは、僕がしたこと悪戯じゃないってわかって  
もらえたみたいですし。

ここで書くのを辞めたら、それこそ裏切りで、彼が貴方を忘れら  
れない原因になります。

だったら、言いたいこと全部書き終ってしまったほうが、いいん  
じゃないですか？」

『……………』

彼女は、ゆっくりと顔を上げた。

『……………そう、ですよね』

そう言って、彼女は『支払いは魂でお願いします』と笑った。

## 郵便屋の仕事(5)

横間さんの手紙を書き終わった後、僕は店の裏にある風呂場に行った。

食事はしなくても問題ないし、食事をしないから当然排泄もしないけれど、体だけは毎日洗わないとどうしようもないので、店の裏に作ってあるのだ。

鍵を開けて中に入り、今度は中から鍵をかける。

人も、霊も入ってこないように、厳重に。

「……はあ」

服を脱いで、軽く頭を振る。

風呂に入るときは、僕が唯一フードをはずすときだ。

誰にも見られるわけにはいかない。

少し古いシャワーは金属音を鳴らしながらお湯を出した。

どちらかというとき灰色に近い黒髪が、水に濡れて束になる。

「シャンプー、どこやったっけ」

独り言を呟きながら、前髪を手で持ち上げ、一日ぶりに良好になった視界に自嘲気味に笑った。

この風呂場に鏡は存在しない。

僕が、意図的につけなかった。それだけだ。

この「化け物」と揶揄される目を自分で見ることができないから。見るのが、怖いから。

「まだまだ、弱いな、僕も」

シャンプーを手にとって、ぐしゃぐしゃと頭を掻き回す。

師匠がいなくなつて、もう3年がたつというのに、僕はまだまだ精神的に弱いままだ。

師匠は「お前はもう大丈夫だから、この店は預けるな、じゃー！」

と言って、僕にこの店を押し付けて、どこかに旅に出てしまった。

一応まだ連絡は来るから、師匠も生きてはいるんだろう。

日本にいるんだか、海外にいるんだか知らないけれど、いつ戻ってくるんだろうか。

本当に、適当な人だ。

修行だなんて言っつて、僕を「怨念」の中に突き落としてみたり、僕の記憶力をあてににして、競馬の統計を作らせてみたり。

「……」

師匠のことを考えたら、なんだか頭が痛くなってきたので、考えることを放棄する。

一瞬間の中に浮かんだ白髪の髪の毛をいつも輪ゴムで束ねていて、アロハシャツを着るのが好きだった「ご老体」を頭を振って消し去った。

やっぱり、もう帰ってこなくていいです、師匠。

店のほうに戻ると、誰かが来た形跡は無かった。

今日は珍しく、睡眠時間がたっぷり取れるかもしれない。

僕は部屋の電気は切り、枕もとにおいてある小型ライトだけつけて布団を頭からかぶった。

明日は横間さんの手紙以外の配達は無い。

一軒しか配達が無いのは、久しぶりのことなので、明日も客の数によつては自由な時間が増えそうだ。

中学校の定期テストまではまだまだ日にちがあるので、学校に行く必要もない。

だからといって、明日何かすることがあるかと言えば答えは「N O」なので、明日は上手くいけば半日近く寝て過ごすことができるだろう。

「……とりあえず、今日は寝よう」

僕は自分に言い聞かせるようにそう呟いて、まぶたを閉じた。

翌日、僕は昨日と同じ電車に揺られながら、また昨日と同じ目的地を目指していた。

昨日はぼったり杉原さんに出くわしてしまったが、今日は昨日よりも早い時間帯だし、彼はいないだろう。

僕は確信じみた何かを感じながら、ぶら下がるように吊革につかまっていた。

「……あれ？」

そうしていると、車内の様子が何かおかしいことに気づく。

そのままの体勢で、きよろきよろと周りを見回すと、昨日もこの電車に乗っていたサラリーマンがいることに気づいた。

しかもあの人は、昨日怨念をぶつけられかけていた、あのサラリーマンだ。

その人の肩に、「怨念」を抱えた霊が乗っていた。しかも、昨日僕が「消した」霊とは別の。

(……) どんだけあの死人に恨まれるようなことしてんだよ

僕はそう思いながら、新聞を読むサラリーマンを見る。

今度の霊は、昨日のとは違い怨念を「ぶつける」のではなく「乗せる」タイプのようだ。

怨念をぶつけるほうが弱い思念で強い効果をもたらすことができるが、その代わり周りの人間にも被害が被る可能性があるのに対し、怨念を乗せるのにはかなり強い思念がないとあまり効果は期待できないが、周りの人間に被害は全くでない。

……らしい。

これは師匠が言っていたことだし、僕は怨念をぶつけられたことも乗せられたことも無いので本当のところはわからないが、きつと間違っではないんだらう。

適当な人だったけれど、知識だけは多かったから。

今度の霊はサラリーマンに怨念を「乗せ」ようとしているだけの様子なので、僕に被害はなさそうだから、不用意に霊を「消す」の

も怨念を「かき消す」こともしない。

冷たいと言われるかもしれないが、そもそも、そこまで人間に恨まれているあのサラリーマンもどうなのだ。

僕に被害が来ないなら、僕の知ったことではない。

そんなことを考えている間に、あのサラリーマンは怨念と霊を肩に乗せたまま電車を降りていった。

## 郵便屋の仕事（6）

昨日見つけたばかりの郵便ポストを忘れることはなく、僕は難なく杉原さんのポストに青い封筒を投函することができた。

「さて、と……」

帰ろうと後ろを振り返ると、そこには何故か横間さんが立っていて、僕は首をかしげる。

杉原さんに用事があるのだろうか。

でも、今日は平日なのだから、杉原さんはここにはいないはず。

昨日あの時間帯に帰宅していたのは謎だけれど。

そこまで考えてから、まあ横間さんが関わりたい相手は彼だけであるとは限らないか、と思いつき、何も考えずに通り過ぎることにした。

『あの……』

した、のに。

何故か横間さんは明らかに僕に話しかけてきている。

僕は再び首をかしげた。

「……」

とりあえず、こんな人目につくところでは話しかけることはできないので、少し離れた裏路地に入りこむ。

「……何ですか？」

『もう、手紙出しちゃいましたよね？』

「はい」

苦い顔をした彼女は、僕の即答にうつむいて見せた。

僕は少しだけ眉をよせて（と言っても、彼女には見えていないだろうけど）横間さんに問いかける。

「何かありましたか？」

『……いえ』

そうやって彼女は首を振った。

「そうですね」

だったら僕には関係ない。僕は再び歩き出す。

横間さんは僕をちらりと見やっつてから、すぐにどこかに行ってしまった。

彼女は何を言いたかったのだろうか。

少しだけ考えて、すぐに止めた。僕には、どうせわからない。

「……面倒事に巻き込まれなきゃいいけど」

以前巻き込まれたことがある厄介なもめ事を思い出し、うんざりした。

「では、今から書きますので、お好きになさっててください」

『よろしく頼む』

店に帰ると、新たな客が店の前に佇んでいた。すぐに話を聞いて代筆を始める。

60代ぐらいの男性は、娘とその婿、それから孫に対する思いをつらつらと述べていた。

手紙を書きながら、僕の記憶には全くない自分の「祖父」というものを考えてみる。

今までの依頼人も、高齢の方が多かったこともあり、いろんな姿を想像できるが、それに現実味があるかと言われれば否だ。

どんな姿を思い浮かべても、どんな口調を思い浮かべても、どんな性格を思い浮かべても、それが自分を叱ったり、褒めたりしているところはどうにも考えられない。

そうしているうちに頭の中に「おじいちゃんだよ」と手を振る師匠が浮かんできたりしたらたまったものではないので、僕はすぐに考えることをやめた。

そうすると、自然と浮かんでくるのは昼間の横間さんのことで、僕はふと手を止めた。

もう手紙を出してしまったのか、彼女は言っていた。

ということは、手紙を出すのを止めたかったということだろう。

……何故？

今日は店を訪れる様子のない横間さんを思い出して、僕は三度首をかしげた。

その翌日も、翌々日も、彼女はやってこなかった。

だからと言って、僕の生活には何ら変化はなく、依頼人が来たらそれに応え、来なければ寝て過ごす。

それだけだ。

「今日は配達2件」

呟いてから青い封筒を鞆に入れる。配達先はどれも割と近所で、歩いて配達できそうだ。

立ち上がるとぐしゃぐしゃの布団が肩から落ちた。

もちろんそれを気にすることはなく扉を開けて、配達中の看板を手取るうとした。

した、けれど。

「……何であんたがここにいるんだ？」

思わず目を見開いて尋ねるほど、僕は驚いた。

そこには、狭い路地を通ろうと必死で、スーツがすすだらけになっている、杉原太一がいた。

「ちよつと、この道どうやって通るんだ！」

啞然としている僕と目が合うと、彼はそう言って叫んだ。

彼の後方には、通行人が彼を怪訝な表情で見ている。

が、彼はそれに全く気付いていないらしい。

僕は仕方がないので、大人が通るには難しい隙間を普通に歩いて通り抜け、彼の前に立つ。

「……何してるんですか？」

杉原さんは僕の問いかけに答えることはなく、スーツについたすすを払っていた。

それから「こんなところに店を構える必要はないだろう」などとぶつぶつ文句を言い、相変わらず啞然としている僕を見る。

そして、眉にしわを寄せてから、浅く頭を下げた。

「……この間は、すまなかった」

「はい？」

何を突然言い出すんだ。

僕はさらに啞然として普段の自分ならあり得ないぐらいぽかんと口を開けた。

「あの……前に悪戯してると決めつけて追いかけたことがあっただろ」

「……ああ、あの事ですか」

よつやく思い当たった僕は、でも、そのことだけを言いにわざわざここまで来るか？と首をかしげる。

別に、よくあることだし、あんなふうに言われたら、杉原さんが怒ることは当たり前だと横間さんも言っていた。

だから、それだけを言いにここまで来るなんてことはないと思うんだけど。

そこまで考えて、やっと僕は気づいた。

「何で、ここがわかったんですか？」

この男性は、どうしてこんなわかりにくい、というより絶対に気づかない場所に構えている店を見つけたのだろう。

郵便屋といつても、生きている人間の客なんてほぼ皆無に等しいから他人から聞いたというのは考えにくい。

「……理穂を追いかけたんだ」

「……は？」

杉原さんは、言いにくそうにそう言って、僕は訳がわからずに眉をよせる。

理穂？ああ、横間さんか、とかるうじて思い出すと、彼はそのまま話を続ける。

「仕事に行こうと思ってアパートを出たら、彼女が居たんだ。アパートの前に。」

それで、追いかけていたら、ここについた。

それで、郵便屋っていう看板が見えたから、君を思い出したんだ」「紺色のパーカーの少年が持ってきた手紙には「郵便屋」という判子が押されていたはずだ、と。

「……はあ」

それで、どうしてここに来たんだ？と、僕が相変わらず眉を寄せたまましていると、彼はその答えを与えてくれた。

「理穂に会わせてくれ！話がしたいんだ！」

彼の手には、僕が代筆した手紙である青い封筒がしっかりと握られていることに、僕はようやく気付いた。

## 郵便屋の仕事(7) (前書き)

誤字脱字などありましたら、ご指摘いただけると助かります。

## 郵便屋の仕事（7）

「……は？」

僕は思わず口をぽかんと開けて聞き返す。

「だから、理穂に会いたいんだ！」

「……会いたって言われても」

手に力を込めてそう叫ぶ杉原さんに僕は困惑していた。

困惑しているうちに、自分たちが通行人にもものすごく怪訝な目を向けられていることに気づく。

「とりあえず、場所を変えませんか」

僕がそういったところで、彼はようやく注目されてしまっていることに気づいたようで、小さく咳払いをして「そうだな」と言った。彼につれられて、近くの喫茶店に入る。全国チェーンの割と大きな店だ。

朝早くから営業しているその店は、9時過ぎだというのに、思いの外、人でごった返していた。

「何か食べるか？」

僕の正面に座った彼はそう問いかけてきて、おごるから、と付け足す。

「……アイスココアで」

正直空腹感は全く無かったが、せっかくの提案なので無下にはできず、僕はそう頼んだ。

杉原さんは自分のコーヒーと僕のココアを注文して、しばらくの間沈黙が流れる。

簡単な飲み物だったためか、すぐに飲み物は運ばれて、一口飲んだところで杉原さんが沈黙を破った。

「で、話はさっきの通りなんだが」

「……とは言われなくても」

僕はストローをくるくると回しながら答える。

氷がガラスのコップにぶつかって音を立てた。

「僕は死んだ人間を見ることはできても、その人を束縛する力はありませんから」

だから、横間さんが今どこで何をしているかなんて把握していないし、いつ店にやってくるかもわからない。

正直にそう答えると、杉原さんは頭を掻いて呟いた。

「そりゃ、そうか」

「申し訳ないんですけど」

霊というのは死んだ人間の魂であり、意思にエネルギーが付着した状態だ。

このエネルギーは霊が活動していると自然と消費されるもので、また、このエネルギーが尽きるまでは地上にいないてはならない。

つまり、僕が代償としてもらっている「魂」とはこの「エネルギー」のことであり、エネルギーが尽きてしまうと霊は地上にいないてできなくなる。

もちろん、「例外」もいることはいるが、大抵の霊はそうなのだ。その霊がもつエネルギーの量には個人差があるが、不慮の事故などで亡くなった霊はエネルギー量が多く、寿命や病気で亡くなった霊はその量が比較的少ない。

また、亡くなった時の年齢も若い方がエネルギー量が多い。

これは、僕が仕事をしていて実感したことでもある。

つまり、何が言いたいかというと、横間さんはまだ若く、死因も確か事故だったはずなので、まだ地上にいるはずなのだ。

僕のような「同業者」に多量の魂を渡していない限りは、だけれ

ちなみに僕は「同業者」は師匠しか知らない。

「杉原さん、横間さんを見たんですよね？」

「ああ……」

見た。だから、ここに来たんだ。

彼はそう言っつて、ふと、気がついたように固まる。

「仕事……無断欠勤だった」

杉原さんは、そう呟くが早いか、徐々に顔色を失っていく。

ちよつとすまない、と僕に断つて、彼は携帯電話を手に取り走って店を出て行った。

サラリーマンは大変だなあ、と、僕は今日の2件の配達を思い出す。

僕の配達は、別に今でなくても、今日中に持っていけばいい話なので、あせつたりすることは無い。

窓の外を見ると、杉原さんは携帯片手にへこへこ頭を下げていた。

電話の相手にはその動きは見えないのに、謝罪するときの反射的な運動なのか、しきりに頭を下げる。

ようやく電話が終わったようで、もう一度店に入ってきた彼は心なしか顔がげっそりとなっていた。

「……サラリーマンは大変ですね」

「全くだよ」

僕の本心からのねぎらいに、彼は大きくため息を吐く。

体調不良ということにしたのだろうか、会社に何と言いつけたのかは知らないが、あまりのその様子に、僕は思わず苦笑いを浮かべてしまった。

「それで……何の話だったかな？」

彼はさっきの電話を忘れようとしているかのごとく頭を振り、僕のほうを見てたずねてきた。

「横間さんを見たのは本当か、という話です」

「ああ……さつきも言っただけれど、本当だよ」

ふむ、と考え込む僕に、杉原さんは露骨に不安そうな顔になる。

その不安そうな顔のまま僕に投げかけられた疑問は、僕の予想したとおりのものだった。

「……死んだ人間が見えるのって、珍しいことなのか？」

「いえ、そんなことはありません」

だから、僕は僕の知っている限り本当のことを口にする。

「僕みたいに見える体質もいますからね。見えること自体は珍しくありません」

「だが……僕は今までそういった類のものは見たことが無かったんだ」

つまり、所謂「靈感」は持ち合わせていないといたいんだらう。世の中にそんな感覚を持ち合わせている人間は、ほとんどいないんだから当然だ。

「死んだ人間は、意思とエネルギーの塊なんです。」

横間さんは杉原さんのことを常に考えているから、その意思が横間さんの存在を濃くしただけです」

「わかったような、わからないような……」

僕の説明では不十分だったらしく、彼は首をかしげた。

まあ、杉原さんと横間さんは恋人同士ですから、見えたって何にもおかしいことはありません、と付け足すと、彼は小さくうなずいていた。

## 郵便屋の仕事(8)

「会って話す……のが無理なら、伝言だけでも頼めないか」

杉原さんは一口コーヒーを飲んでからそう提案してきた。

僕は渋い顔をしながら告げる。

「……ここ数日、横間さん店に来てないんで、伝言もいつになるかわかりませんよ?」

「……」

杉原さんは悩ましげに頭を掻いた。どうしたものかと唸る。

「杉原さん、彼女に会って何を話すんですか?」

そんな彼を見て、僕はふと疑問に思ったことをそのままたずねた。顔を上げた杉原さんは、そのまま自分の鞆に視線をもっていく。

そこから視線をはずすことなく、彼は僕の問いに対する答えを口にした。

「あの手紙の意味を知りたいんだ」

「意味?」

何か意味深なことを書いただろうか。と、今度は僕が悩む番だった。

先日書いた二通目の手紙を思い返し、

「ああ」

合点がいつてうなずく。

「二度と私を思い出さないでください」

そして、彼もうなずいた。

僕はこの商売をする上で、手紙の内容に一切口を出さないことを自分の中でルールとしている。

本人の意思を告げてこそこの仕事なのだ。

僕が手紙の内容に口を出して「そんなこと書くのは止める」なんていうことはしないし、ましてや内容の改ざんなどもっての外だ。

それゆえ、考えても無駄なので内容のことは考えずに言われたことだけを書くようにしている。

だから、おかしなことを書いているつもりはひとつも無かったのだけれど。

確かに、言われてみれば無茶なことを要求している文だ。

そして、そういえばと思い出す。

「あの時、手紙出したかって聞いてきたのは、さすがに無茶な要求だと気づいたからか……」

「ん？何の話だ？」

僕の呟きが聞こえたらしく、杉原さんは身を乗り出して尋ねてきた。

正直に答えると、彼はまた小さく唸る。

「だったら、何で最初からこんな文を書くこと……？」

横間さん本人にしかわからないその答えだけれど、彼は答えを探さずにはいられないようで、眉間にしわを寄せて考え込んだ。

僕はすっかり氷の溶けたココアを一口飲む。少しだけ薄められたココアは、思いの外まずい。

自分の世界に入り込んでしまった杉原さん越しに窓ガラスの外をぼんやりと見た。

とにかく、彼の用件は僕にはどうしようも無いことだ。昼時には彼もあきらめて仕事に行くだろう。

配達は昼からになってしまいが、急ぎの配達ではないから問題ない。

一人計画を立て、相変わらず眉間に深いしわを刻んでいる杉原さんを眺めた。

諦めが悪い人だな。

そんな失礼なことを考えて、無表情に彼を見つめる。

「とにかく、理穂が見つければ……」

僕はその様子に気づくことなく、彼がそう呟いて頭を抱えたときだった。

「……あ」

彼越しに見た、その「透けた」人影は、

「横間さん」

僕の呟きに、彼はものすごいスピードで立ち上がった。

「本当に見たんだな！」

「今も見えてますよ」

僕が彼女を見失う前に慌てて勘定を終わらせた杉原さんは、店を出るなりそう叫んだ。

人ごみにまぎれて何度か見失いそうになるが、彼女の姿はまだ捉え続けている。

と言つても、霊は人をすり抜け壁をすり抜けどこへでも行くので、いつ姿が見えなくなってしまうてもおかしくは無い。

「追うぞ！理穂の進むほうを教えてください！」

有無を言わせぬ口調で僕の腕をつかむ彼にぎよつとし、しかしそれに気づかない彼はそのまま走る。

僕は横間さんを見失わないことと、つかまれた自分の「腕」に意識を集中させるという、非常に疲れることをやりながら彼に引きずられるように走った。

杉原さんはどうやら彼女の姿が見えていないらしく、僕が「右」「左」と言う声を頼りに人を掻き分け進む。

彼女は重々しいため息を時折つきながら、徐々に暗い路地のほうへと入っていった。

それに伴って、僕らの周りに「生きている」人間が徐々に少なくなっていくって、「死んだ」人間の数が上昇するわけではないが、何が言いたいかというと、人ごみから抜け出した、ということだ。

横間さんは、僕らのことに気づいているのだろうか？

ふと疑問に思う。

僕らに気づいてどこかに誘導しようとしているのか、それとも、まだ気づいていないのか。

どちらなのかわからないが、杉原さんががむしゃらに走るので、僕はそれに従うしかない。

いい加減息が切れてきた。普段運動なんて配達に行くときぐらいなんだから、当たり前と言えはそうだけど。

そろそろ止まってくれないか。

「理穂……！」

その願いが通じたのかわからないが、杉原さんは大声で彼女の名前を呼び、そして横間さんは驚いたように振り返った。

どうやら彼女は僕らに気づいていなかったらしい。

汗をぬぐう杉原さんと、肩で息をする僕を、目を見開いて見つめている。

「理穂……そこにいるのか？」

杉原さんには姿が見えない「彼女」に呼びかける。

呼びかけられた横間さんは、驚きで声も出ない、と言った様子だろうか。

「何で……太一が……」

ようやく発された声は、震えていた。

## 郵便屋の仕事（9）

「何で……」

彼女は目を見開いてか細い声でそう呟いた。

横間さんが止まったことにより、僕が立ち止まり、それに伴って杉原さんも走るのを止める。

「おい、理穂は何か反応してくれているのか？」

杉原さんが僕の腕を放しながら僕に問いかけ、僕はようやく腕から意識を開放してから答えた。

「何で、杉原さんがここにいるのか、とずっといますよ」

僕がそう言うと、彼は思い切り眉を寄せる。

横間さんが少しだけ怯んだように身を震えさせた。

「何でって、あの手紙のことを聞きに来たに決まってるだろ」

「……」

不機嫌そうな杉原さんに、横間さんは何も言わずにうつむいていた。彼は僕のほうを見てきて、僕が首を横に振ると眉間のしわを余計に濃くする。

「二度と思いつなあって、どういうことだよ！」

「……言葉のとおりよ」

驚きに目を見開いていた彼女だったが、少し落ち着いたのか、返事を返した。

横間さんの言葉を僕が通訳すると、彼は睨みつけるように目の前の彼女を見る（尤も、彼には横間さんの姿は見えていないだろうけれど）。

「何でそんなこと書いたのかって、聞いてんだ」

「……」

また沈黙した彼女を、僕は無表情で見ている。

それに気づいたのか、横間さんは杉原さんの質問に答えることな

く僕に尋ねる。

『ねえ、郵便屋さん』

「何ですか？」

『何で、太一に私の居場所を教えたの？』

それは僕を非難するような声色で、しかしだからといって怯むわけでもなく僕は淡々と答えた。

「ほぼ連れ去られたに近いですかね。」

店の前の大通りでわめいていらっしやっただので、仕方なく話を聞いてみたらこうなりました。

横間さんを見つけられたのも偶然ですよ。僕には人を探知する力なんてありませんから。

アイスココアおごつてもらいましたし、その分ぐらいは働きます」  
氷が溶けてしまつて途中からは飲めたものじゃなかったけれど。

僕がそう答えると、横間さんは『そう……』と言つて黙り込んでしまった。

そこに、さっきまで空気と化していた杉原さんのどすの聞いた声が入ってくる。

「で、俺の質問に答えてくれ」

横間さんはうつむいたまましゃべらず、僕は口出しせず、しばらくの間誰も何も言わなかった。

『……だつて、太一、泣いたじゃない』

ぼつり、と呟かれた言葉が僕の耳に届く。

僕がすぐに杉原さんにその言葉を伝えると、彼は驚いたように目を見開いた。

『手紙読んで、泣いてたじゃない。それ見て、手紙出したことすごく後悔した。』

でも、一度出しちゃった手紙はもう無かつたことにはできないし、また書くよつて書いてちゃつたし、郵便屋さんにも出すのを止める方が裏切りだつて言われちゃつたし……だから、もう一度手紙を書い

た  
』

そういえば、そんなことを言ったかもしれない。  
やっぱりおせっかいが過ぎたかな、と僕は少しだけ後悔した。

僕が杉原さんに「通訳」しながら、横間さんの独白は続く。

『でも、郵便屋さんに内容しゃべってたら、やっぱり、自分は死んだんだって、思えた。』

もうあの事故から太一が仕事に復帰するぐらい日にちは経ってるのにね。

そう思ったら、私が書く手紙は、太一を縛り付けてるだけなんじゃないかと思つて……。

そんなのいやだった。

この手紙が貴方を縛り付けるものになってしまつぐらいなら、その手紙で貴方を解放したかった』

彼女はそう言つて、再びうつむいた。

正直、僕は彼女の考えを愚かだと思つた。

二度と思ひ出すな、なんて無理なこと「まだ好きな相手」から言われたら、それは余計に杉原さんが横間さんを忘れない鎖になってしまうだろうに。

そこまで考えて、僕は独りああと合点がいった。

それに気づいたから手紙を出すのを止めようとしたのか。

そううなずきながら、僕が杉原さんにその話を伝えようとしたとき、

「何でお前はいつもいつもそうなんだ！」

彼は、大声で怒鳴つた。

『え？』

彼女が思わずと言つた様子で聞き返す。

杉原さんはそのままの勢いで怒鳴り続けた。

「いつもいつも、自己完結して、勝手に決め付けて。」

僕のためを思つてくれていたのかも知れないけれどな、そんなの

「逆効果なんだよ！」

その言葉に、横間さんも黙ってはいない。

杉原さんに負けない大声で彼に怒鳴った。

「わかってるわよ！」

余計に太一を苦しめるだけだつて気づいたから、手紙を出すのを止めようとしたんじゃない！

気づいたのが遅すぎて手遅れだったけれど！」

「ああ、そうだね！いつも気づくのが遅すぎるんだよ！理穂は！

どう責任取ってくれるつもりだ！」

「だから、どうしようかって考えてたら、貴方が私を追いかけてきたんでしょ！」

僕は二人の「喧嘩」を聞きながら、居心地の悪さを感じている。

杉原さん、僕なしで普通に横間さんと会話できているし。見たところ、姿も見えているようだし。

あれか、師匠が言っていた「近しい者通しは波長が合いやすいから霊の姿を確認しやすい」ってやつか。

完全に邪魔者となった僕は、とりあえず3歩下がってその様子を眺めた。

「大体何を勘違いしているのか知らないけれどな、僕が泣いたのは手紙がうれしかったからだ！」

2週間前に死んだお前から手紙が来て、死んでも僕のこと心配してくれていて、やっぱりお前はお前なんだと思えて、うれしかったから泣いたんだ！」

『でも、その手紙が私を忘れられなくしてるんじゃない？』

杉原さんの言葉に、目に見えて横間さんの声に勢いが無くなる。

だが、逆に杉原さんの声の勢いは増すばかりだ。

「まだお前が死んでから2週間しか経っていないんだ！」

そんなすぐに好きな女忘れるほど、僕は薄情じゃない！」

『太一………』

「これから先、もしかしたら僕はまた誰かを好きになるかもしれないな

い。

でも、だからと言って、君を忘れることはできないし、君と過ごした日は決して無くならない」

『……ありがとう、太一』

横間さんの目から涙が零れ落ちる。

彼は、それを見て苦しそうに声を発した。

「だから、二度と思い出すな、なんて言わないでくれ」

『ごめんなさい』

完全に僕のことなんて忘れ去った彼らは、お互いに触れることはできないと言っつのに、お互いを求めるように手を伸ばす。

僕は彼らに気づかれることなく1歩2歩と後ずさり、その場を立ち去ることに成功した。

## 郵便屋の仕事（10）

無事、今日の配達を終えた僕はいつもの数十倍の疲れを感じながら店の鍵を開けた。

静まり返った部屋に入り、僕は倒れこむように畳に寝転がる。

手元にあった布団を手繰り寄せて頭からかぶり、今日はもう仕事をしたくなくてため息をついた。

肉体的に疲れた。それ以上に精神的に疲れた。

自分の普段の走るスピードよりもかなり早い早さで走りまわされ、おまけに腕をつかまれて「意識的」に「無意識」を封じ込めることになってしまった。

こんな思いをしたのは、久々だ。

そして、二度とこんな思いをするのはごめんだった。

「……恋人ねえ」

全く、人騒がせな代物だな、と改めてため息をつく。

横間さんは、また手紙を書きに来るのだろうか？あの体の透け具合からして、もうあまり地上にいられそうでは無かったけれど。

死から2週間、いや、もうすぐ3週間か。それで、手紙も2通出した。

魂はずいぶん消費されているはずだ。

「ま、僕には関係ないけれど」

静かな部屋で一人そう呟いてから、僕は目を閉じて久しぶりに感じる睡魔に身をゆだねた。

『あの……』

「……いらつしゃい」

どれくらい眠っていたのだろうか。

女性の声に目を覚ますと、辺りはもう暗闇に包まれていて、自分

がよっぽど疲れていたことを自覚した。

苦笑しながら、目の前にいる横間さんに目をやると、彼女は恥ずかしそうにうつむいている。

『昼間はすみませんでした』

僕が声をかける前に彼女はそう言って、深々と頭を下げた。

「別に、気にしていませんよ」

いつものような平坦な声で答える。

半分嘘。半分本当。

横間さんと杉原さんのおかげで睡魔に見舞われるほど疲れきってしまったが、一眠りしたらどうでも良くなっていた。

思いの外単純な自分の性格にもう一度苦笑してから、「手紙ですか？」と尋ねる。

彼女は静かに首を横に振った。

『手紙は、もういいんです。』

彼と直接しゃべって、言いたいことも言ったし、聞きたいことも聞けました。

ただ、郵便屋さんに謝罪と挨拶がしたくて』

やっぱり、彼女は律儀な性格だったようだ。

もう一度下げられた頭を見て、僕は頭を上げるよう頼む。

「本当に、気にしていませんから。」

それに、そろそろ時間なら杉原さんと一緒に居たほうがいいのでは？

僕の言葉に、彼女は弱弱しく笑って『挨拶、の意味もわかってらっしゃるんですね』と言った。

『彼にはもう、最後の挨拶をしてみました。どうしても、郵便屋さんには謝りたかったので。』

それと、2通でしたけれど、彼に手紙を書いて、届けてくださって、ありがとうございます』

「……いえ」

お礼を言われ慣れていない僕は、どうしたものかと頭をかく。

最後の挨拶だ、と言ってやってくる依頼人は、居なかったわけではない。

それでも「ありがとう」なんて真正面から言われたのは久しぶりで、どうしたらいいのかわからなかった。

がらにも無く狼狽している僕に、横間さんはクスリと笑って、「それでは」ともう一度頭を下げ、消えた。

誰も居なくなった部屋の中で、僕は小さく、微笑んだ。

「……何やってるんですか？」

翌日再び配達に行こうと店を出たら、また、杉原さんが狭いビルとビルの隙間に杉原さんが挟まりかけていた。

「いや、昨日はすまなかった」

「……いえ」

僕がそれに気づいて近寄ると、彼は横間さんと同じように深々と頭を下げる。

「でも、君のおかげで理穂ともう一度話げできた。本当に感謝している」

「……偶然ですから」

正直、照れくさくて少しだけ居心地が悪い。

この人たちは二人そろってすごく律儀だ。

礼をさせてくれと言っ彼の言葉を丁重に拒否して、僕は「配達があるから」と歩き出す。

杉原さんはスーツ姿だ。今日が何曜日かは完全に曜日感覚の無くなった僕にはわからないけれど、きつと仕事なのだろう。

遅刻しますよ、とだけ余計なお世話を付け加えて、僕はもう杉原さんのほうを見るのを止めた。

そんな僕に、杉原さんは叫ぶ。

「……僕は、絶対理穂のことを忘れない！」

人の記憶力は絶対じゃない。

絶対忘れないなんて、不可能なことを宣言するのはやめておくべきだ。

いつもなら、そう考えて自嘲気味に笑ってしまつところだが、僕は決して杉原さんを振り返ることなく、かといっていつものような不快感は一切感じなかった。

## 郵便屋の仕事(10)(後書き)

郵便屋の仕事編はこれで終了です。

誤字脱字などありましたら、ご指摘お願いします。

## 郵便屋と怨念（1）（前書き）

今日は初めて2話投稿しました。

誤字脱字などありましたら

ご指摘お願いします。

## 郵便屋と怨念(1)

今日も僕はいつもどおり仕事に励んだ。

先ほど聞いた内容を頭の中で思い浮かべ、一字一句違わぬように手紙を書いていく。

そろそろ、ペンのインクが切れるころか。今度買いに行こう。

そんなことを考えていると、何かの気配がした。

ものすごいスピードで壁をすり抜け、僕の目の前に立ったのはジヤージ姿の男性。

「いらつしゃい」

『親友を助けてくれ!』

とりあえずいつものとおりそう声をかけると、彼は開口一番にそう叫んだ。

僕は郵便屋。

仕事は手紙を代筆して、それを配達するという、単純明快な内容となっている。

ただし、客は「死んだ」人間……つまり、霊だが。

代償として金、物品、あるいは魂を受け取ることでの商売を成り立たせている。

つまり、僕の仕事に人助けは入っていない訳で、僕は目の前の男の言葉に首をかしげた。

「ここは郵便屋です」

『知ってる!』

彼は焦ったように詰め寄ってきたので、僕は思わずのけぞる。

「……とりあえず、落ち着いてくだ」

『親友に、呪いがかけられたんだよ!』

「……はあ?」

何を言い出すんだ、こいつ。

僕は目の前の男を眉を寄せて凝視する。

「とにかく、助けてくれ！」

あんた、霊が見えるんだろ？ 怨念が見えるんだろ？！助けてくれよ！」

それに気づかない男はまくし立てるが、僕は眉間のしわを濃くしただけだった。

「中条亘さん……で、よろしかったですか？」

「ああ」

とりあえず、興奮状態の彼を落ち着かせて、身元を確認した。

さつき、彼がまくし立てた言葉を整理して状況を把握するためにたずねる。

「で、親友の藤崎裕二さんが呪われた……つまり、怨念に当てられた、ということでしょうか？」

「ああ。だから助けてくれ！」

彼は、一応興奮状態からは戻ってきたようだが、まだ焦ったようにたびたび僕を急かしてきた。

僕は相変わらず眉間にしわを寄せたまま、はっきりと言い切る。

「管轄外なのですが」

「は？」

中条さんは、僕の言葉の意味がわからないと言ったように、怪訝な顔をした。

「だから、僕は郵便屋であって、他人の怨念を消すことは業務内容に含まれません」

その言葉を僕が発した途端、彼は目を見開いて、僕に詰め寄ってきた。

「業務内容って……人が呪われてんだぞ！ 何で助けてやらねえんだよ！」

あいつ、すっげえ苦しんでるのに！」

生きた人間だったら、つばが飛んできそうな勢いで中条さんは怒

鳴る。

耳元で大声を出され、僕は反射的に後ろに身を引き、そのまま表情で不快感を露にした。

「何で、人助けしなくちゃいけないんですか？」

「何でって……」

助けられる力があるなら、助けてやるのが当たり前だろう。

彼は、僕の質問に、全く答えになっていない答えを返してきた。

少しいらいらしながら、でもその様子は微塵も見せることなく僕は再び尋ねる。

「何で、助けられる力がある人間は助けるのが当たり前なのですか？」

「……何が言いたい」

「言葉の通りです」

中条さんは睨むように僕を見た。

「最低だな」

そして、彼は蔑むようにそう言った。

相変わらず深くフードをかぶり、目元が見えないために僕の表情はほぼつかめないが、今の僕は目が見えていたとしても、きっと誰にもつかめない表情をしていただろう。

鏡で見たわけでないから絶対とは言い切れないが、きっと今の僕の顔はこれ以上ない無表情だ。

「……じゃあ、お尋ねしますが、貴方のご友人は何故、呪われたのですか？」

「え？」

僕は静かに問いかける。

「まるで、中条さんの言い草は、呪いをかけた方が一方的に悪く、呪われた方は何も悪くないみたいじゃないですか。」

他者に向けられた念に当てられた、と言うことなら話は別ですが、貴方の慌てぶりを見るとどうやらかなり藤崎さんが苦しんでいらっしやるようなので、本人に向けられた怨念なのでしょう。

だったら、そこまでの怨念をぶつけられた、貴方のご友人には何の非もないのですか？」

「……………」

中条さんは黙り込んだ。

きつと、親友のことを心配した故のその言い草なのだろうが、あまりにも一方的過ぎる。

「藤崎さんに怨念をぶつけた霊だって人間です。貴方や私、それに藤崎さんと同じ。」

怨念なんていうのは、ただの負の感情の塊です。

そこまで負の感情を集めた霊が悪いと、おっしゃるのですか？」

僕の声は、静かに部屋に響く。

彼は、小さく『悪かった。邪魔したな』と言って消えた。

霊だって「人間」だ。

悲しみもするし、怒るし、恨む。

その感情が少し大きくなりすぎてしまったのが「怨念」だ。

だから、他人の感情を勝手に無下にすることなどできない。

尤も、僕は自分勝手な人間だから、その被害が自分に及びそうだったら容赦なく霧散させるけど。

「はは……………人のこと、言えないな」

自嘲気味に自分の笑い声に、またいらいらしてしまう自分は、本当にどうしようもないと思う。

## 郵便屋と怨念(2)

「……………」

『頼むよ』

いつまで、この何の意味ももたないやり取りを繰り返せばいいのだろうか。

そろそろ頭が痛くなってきた。

「だから、管轄外だと」

『そこを何とか！他に頼める伝なんて知らねえんだよ！代償も支払うから！』

僕の目の前に居るのは、先日僕が怒らせてもう二度と来ないだろうと思われていた中条さん。

今日で3日連続僕のところへ頼みに来ている。

「……………」

『このとおりだ！』

彼は両手を合わせて「合掌」し、僕に頭を下げ続けた。

『昨日はすまなかった！』

「……………」

中条さんが怒って出て行った翌日、彼は配達に出かけようとしていた僕の前に突然現れ、そう言って深々と頭を下げた。

二度と顔を合わせることはないと思っていた僕は、驚いて目を丸くした。

『昨日の俺はどうかしていた！』

いくら裕二が心配だからといって、言っていないことと悪いことがあったはずだ。

社会人として恥ずかしい。許してくれ！』

「……………」いや、別に気にしていませんけど」

どうやら中条さんは、根はあのような横暴な人ではないらしい。

時間が経って、落ち着いたようだ。

僕は、少しでも安心して配達に出ようとした。

が、中条さんが僕の前に立ちふさがる。

「……何してるんですか？」

僕でない人なら、何も気にすることなく彼を「通り抜け」て前に進むことができただろう。

だが、僕はそんな風にできないので、反射的に立ち止まった。

『昨日の俺の言い分は間違っていた。だが、裕二を助けてやってほしいのは本心だ。』

頼む。あいつを助けてやってくれ！』

そう言っただアの前に立つ中条さんを見て、僕はあきれたように眉を寄せた。

「昨日も申し上げましたが、管轄外です」

いくらそう言っても、彼はドアの前から動く気配がない。

困り果てた僕は、フードごと頭をかいて「……どいてください」と呟いた。

『あなたがYESというまで、俺は立ち退かねえ！』

「……はあ？」

なんとという営業妨害だ。

僕はどうしたものかと彼を見る。

中条さんの目は決意に満ちていて、さらにどうしようもなく僕はまた頭をかいた。

結局、その日は「営業妨害だ」という僕の言葉に中条さんが折れ、彼が出て行ったものの、それから連日やってくるようになった彼に、僕は正直心底頭を抱えていた。

『大体、郵便屋が呪いを解いたらいけねえなんて決まりはないだろ』  
「だから、呪いだって感情の塊なんです。不用意に消すことはできません」

『だからって、苦しんでるやつを見逃していい理由にはならないだ

る？』

「じゃあ、呪いをかけた本人は苦しんでいないとでも？」

「だからこそ、双方が苦しんでいるんだからさっさと呪いを解消して裕二も、呪ったほうも苦しみから解放されねえとだめだろ』

「誰が苦しんでいようが僕には関係ありません」

「そこをなんとか！」

「……」

師匠、こういう客のあしらい方は聞いていません……。

思わず思い出したくないはずの師匠に心の中で呼びかけてしまうほど、僕は困っていた。

「頼む！」

彼が再び勢いよく頭を下げたとき、

「あの、すみません……」

どこかの高校の制服を身にまとった女子の霊が、扉をすり抜けて来店した。

「いらつしゃい」

僕は内心ほつとしながら、中条さんを無視してそちらに視線を向ける。

他の客の迷惑だ、とばかりに手をひらひらとふると、彼は少しむっとしたが、おとなしく店を出て行った。

「手紙の代筆ですか？」

うるさいのが居なくなつて、いつもよりも少しだけ上機嫌に問いかける。

と、目の前の彼女は少しだけ不安そうに質問し返してきた。

「あの、郵便屋さん、ですよね？」

ああ、この見た目だから、僕が郵便屋に見えなかったのだろう。良くあることなので、僕は平坦な口調で返答した。

「はい。郵便屋です」

うなずいた僕を見て彼女は、いつかの誰かのように、僕の目の前まで身を乗り出す。

『兄を……藤崎裕二を助けてほしいんです!』

……。

なんだか、聞いたことのある台詞。

激しくめまいがしたような気がした。

「……で、藤崎裕二さんの妹の藤崎薫さんで、よろしかったですか?」

『はい』

とりあえず名前を聞き、彼女がうなずいたことを確認して、その隣にいる中条さんに顔を向ける。

彼は薫さんの来店により、いったん外に出たが、『ひよつとして薫ちゃん?!』と叫びながら例のごとく全速力で再来店したのだ。

「……中条さん、面識あります?」

『いや、裕二から写真を見せられたことはあるが、直接会うのは今日が初めてだ』

彼はそう言って『写真よりも実物のほうが可愛いな』と、彼女に微笑みかける。

薫さんは、微笑を浮かべてその言葉をかわしていた。

「その裕二さんて人、これだけ心配してもらえる人間なのに、何で呪いなんてかけられたんだ……」

僕は独り言を呟いて、大きくため息をつく。

『乗り気になってくれたか?』

目をらんらんと輝かせる中条さんに、僕はもう一度大きくため息をついた。

### 郵便屋と怨念(3)

「…………どうしてこうなった」  
僕の呟きは、誰にも聞き取られることなく街中の騒音に消え去った。

『おーい、郵便屋、もっと早く歩けねえの?』

大きくため息をつく僕の前を中条さんが歩き……否、浮遊し、僕の隣で薫さんが『ありがとございます』と未だに頭を下げ続けている。

この人ごみの中なので、僕は中条さんに話しかけることはせず思い切りならみつけた。

『ああ、そつか。』

生きているときは物すり抜けるなんて無理だったんな』

だが、僕は目が隠れた容姿のため、彼は僕の鋭い視線に気づくことなくあっけからんと笑う。

死んでからまだ5日しか経っていないのに、案外生きているときの感覚って忘れるんだな、と言いながらさらに笑みを深くした。

『ちよつと、中条さん……。』

郵便屋さんには無理言っただけお願いしているんだから』

その彼をとがめるように、薫さんが小さな声でそういうが、中条さんが聞く耳を持つとは到底思えないし、実際彼は手をひらひらとふっただけだった。

「はあ……………」

僕は大きくため息をつく。

そういう薫さんも、さつきは酷い手使ってくれたじゃないか。思い出して、またため息が出た。

結局、二人の『頼む』『お願いします』という言葉につなずいて

しまう形になってしまった。

最初は人数が増えたところで、とずつと拒否していたのだが、そうしているうちに薫さんの目尻に涙がたまり始め、『女の子泣かせる気か!』と中条さんに言われ、気がついたら、

「わかりました!とりあえず見に行くだけですからね! 怨念を取り払えるかなんて、わかりませんからね!」

と、叫んでしまっていた。

ガラにもなく大声を出していることと、台詞の中身が大問題だと言うことに気づいたときにはもう遅く、『本当ですか!』と途端に涙を引つ込めて花が咲いたように笑った薫さんを見て、僕は女性の恐ろしさ、と言うものを知った気がした。

『よっしゃ、郵便屋が意見を翻す前に行くぞ!』

中条さんがそう宣言すると立ち上がり、『ほら、立て!』と僕を促す。

仕方なく立ち上がって「配達中」の札をかけて二人の霊を遠ざけてから鍵をかけた。

「で、ここが裕二さんのアパートですか?」

『ああ、ここだ』

中条さんに確認を取ってから、一人暮らしをするにはちょうどよさそうで、かといって「ぼろアパート」ではない一般的な建物の前に立つ。

「……………」

僕は、そのアパートを見上げた瞬間眉をひそめていた。

『……………やばいだろ』

さっきまでからからと笑っていた彼は、下唇をかみ締める。

薫さんも、何も言わなかった。

「……………近年まれに見る、と言うか」

そのアパートの5階部分にだけ、大量の霊が引っ付いている。おそらく、「怨念を溜め込んでいる最中」の霊が引き寄せられて集ま

ってきたのだろう。

普通の霊に害はない。ただし、怨念を溜め込んだ霊は例外だ。生きている人間に害を加えることができ、その上怨念を溜め込んだもの同士で惹かれあやすい。

そして、「怨念持ち」の霊には生半可な覚悟でなれるものではない。

僕はその光景に眉を寄せた。

これは中条さんと薫さんにはきつと見えていないのだろうか、  
「怨念が、黒い霧みたいだ」

その霊たちを取り囲むように、快晴の空とは正反対の、真っ黒い霧のようなものが立ち込めていた。

「……単独の怨念じゃ、ここまでにはならないだろう」

きつと、もともと彼に怨念を「ぶつけた」あるいは「乗せた」霊は複数。

とはいっても、10人もいないと思うが。

その怨念に引き寄せられた大量の霊が溜め込んでいる怨念が相乗し、さらに怨念が濃くなっているようだ。

『お兄ちゃん……』

兄の身を案じる薫さんの言葉は、少しだけ涙ぐんでいた。

中条さんは、黙り込んで何も言葉を発しない。

「……ん？」

そんな中で僕は他の霊と違い、地面にたたずむ霊を見た。

僕らの500メートルぐらい先にたたずむ、独りの女性の霊。

彼女はぶつぶつと何かを呟きながら、アパートをじっと見つめ、しばらくするとどこかに消えた。

どこかで会ったことがある気がする。僕は首をかしげ、思い当たった言葉をそのまま呟いた。

「……あのときの電車の？」

その呟きに、返ってくる言葉はなかった。

が、僕の脳裏には、はつきりとあのときの光景が浮かんでいる。

確か、以前横間さんの手紙を配達しているときに、サラリーマンらしき男性に怨念を「乗せ」ていた女性だったはずだ。

「中条さん」

「なんだ」

僕はアパートに視線を向けたまま中条さんに尋ねる。

「裕二さんって、眼鏡かけてるんですか？」

「ああ」

「電車で出勤してました？」

「……そうだけど」

「その電車の中で、毎朝新聞読んだりしてませんでした？」

そこまで質問して、ようやく二人の視線がこちらに向いている「とに気づいた。

「多分、裕二さん見かけたことあると思うんですよね」

「……え？」

二人の驚く顔が視界に入る。

僕は無表情のまま彼らに視線を向けた。

郵便屋と怨念(4) (前書き)

遅くなりました。  
申し訳ありません。

## 郵便屋と怨念(4)

「以前の配達で電車に乗っているときに、怨念乗せられかけてる男性を見たことがあるんですけど、多分裕二さんだと思っんです」

もう一度アパートに視線を戻しながらそういうと、二人は少しだけ困ったような表情を浮かべた。

が、口を開こうとはしなかったので、僕は先を続ける。

「一番初めに見たときは僕や他の乗客にも被害がありそうだったから怨念霧散したんですけど、二回目はなさそうだったから放っておいたんですね。」

まさか、ここまでなるとは想定外もいいところですけど」

まあ、本当に同一人物かどうかは会ってみないとわかりませんけど、と付け足してアパートに向かって歩き出すと、

『裕二を、助けてくれるのか?』

中条さんは今更そんなことを言い出した。

さっきまで半分無理やりに連れてきておいて、と僕は少しあきれたが、小さくうなずく。

「……これは、下手をすると裕二さんだけの被害に留まりそうにありませんからね」

群がっている霊の数からして、この状況は異常だ。

郵便屋の仕事の枠は超えているが、仕方あるまい。

これは「僕個人」も被害にあってもおかしくない状況だ。自身に被害が行く前に片付ける必要がある。

「とにかく行きましょう。部屋はどこですか?」

僕が尋ねると、中条さんが『着いて来い』と言って、進み始めた。

アパートの5階の廊下は、真っ黒い霧が立ち込めているようだった。

まだ昼間で、明るはずなのに、四方八方を怨念持ちの霊が囿んでいるからだ。

「……これはやばいな」

僕はポツリと呟いて眉をひそめた。額に脂汗がにじむ。

普通の人間なら、すぐに怨念に当てられてくたばってしまうだろう。

ここに来て初めて僕は裕二さんの心配をした。

『鍵はその裏に置いてあります』

「了解しました」

薫さんの言葉に、扉をすり抜けることのできない僕はうなずいて鍵を拾う。

鍵穴にそれを差し込んで回すと、かちゃんと軽い音を出して鍵が開いた。

僕は無遠慮にドアを開けて中に入る。インターホンなんて押すわけがない。

「失礼しまーす」

『……』

軽い調子で靴を脱ぎながらそう言った僕を見て、中条さんは無言でいつそう眉をひそめる。

正直言つて、この部屋に入りたくはない。だが入らなければならぬ。

だから、顎を垂れた玉のような汗を振り払うように、あえて軽い調子でそういった。

何故なら廊下の霧とは比べ物にならないからだ。そこには良くぞここまでと言いたくなるぐらいの「怨念」が立ち込めている。

「裕二さん、どこにいらっしやいますかー……あ」

『お兄ちゃん！』

僕の軽い声とは対照的に、薫さんの声はまるで悲鳴のようだった。だが、彼女の声は彼には届かない。

「……やばいな」

床に寝転がる、否、倒れている彼の、頬はこけ、顔色は白をとうに通り返して青く、目は苦しげに閉じられていた。

僕の声すら届いていないのかもしれない。

裕二さんは不法侵入である僕の声にも何の反応も示すことなく、時折小さなうめき声をもらすだけだった。

とりあえず、裕二さんをベッドまで運ぶため僕は全意識を両腕に集中させて彼を引きずった。

これ以上エネルギーがなくなったら、本当に死んでしまうかもしれないから、特に慎重に。

そしてベッドまで運び終わると、手早く「鍵」をかけた。

これは物理的な鍵ではなく、店のものと似た「内側に居るもの以外を拒む鍵」だ。

「外に居た霊が消えた……」

その様子を見ていた中条さんが啞然とした様子で呟いていたが、今は忙しいから無視。

「これから僕がいいと言うまで、この部屋から出ないでくださいね。この部屋に入れなくなりますから」

必要事項だけ告げて、僕は換気をするべく窓を開けた。

彼に「乗せられた」り「ぶつけられた」りした怨念は消えることはないが、少しでもこの黒い霧のような怨念が霧散されることを期待して、だ。

それだけやって、一息つくつと、薫さんが裕二さんの顔を覗き込んでいるのが見える。

「お兄ちゃん……」

霊の姿はほとんどの場合普通の人には見えないということもあるだろうが、衰弱しきった彼は、何の反応も示さなかった。

「……」

僕はその様子を少しだけ眺めてから、彼に近寄って、影響の出な

い範囲で怨念を霧散させる。

顔色は変わらないが、少しだけ寝息が安定したように思われた。

「やっぱり、僕が電車で見た人と同じ人ですね……」

『……なんで、怨念全部取っ払ってやらないんだ？』

僕の呟きに反応することなく、中条さんがそう問いかけてきた。

それは、非難と言うより、純粹に「疑問」のようだった。

「怨念持ちではない中条さんたちにはわからないと思いますが、靈  
つて自分の怨念に敏感なんですよ。」

自分の怨念が全て消されたら、対象に何かあったと思って、ここ  
にまたやってきます。」

怨念持ちの靈の力は、計り知れません。僕が対応できる靈かどう  
かもわからない。

だから、怨念をかけた相手を探ってから出ないと、全ての怨念を  
霧散させることはできません」

僕の答えに、中条さんは何か口を開きかけて、止めた。

## 郵便屋と怨念(5)

「あ、郵便屋さん違いますって!」

「……」

たった今、僕は薫さんに教えてもらいながら病人食を作っている。もともと自分がほとんど食事をしないため、料理などはからっきしなのだが、裕二さんに何か食べさせる必要があるから仕方がない。久しぶりな鍋や包丁に少しばかり緊張しながらも薫さんに言われるがまま手を動かす。

「水、入れすぎです!」

「……」

見るからに女子高生な彼女は、生前は親を手伝って家事をよくしていたのだそうだ。

違う違うと僕を怒る薫さんはどちらかと言うと「母」に見えて、僕はこっそり視線をそらした。

母親という存在は、未だに苦手意識がある。

「……これでいいんですか?」

「……まああつてところですかね」

完成した卵粥に、薫さんは辛口な評価を述べて、裕二さんに付いている中条さんの様子を見に行った。

その後姿を確認して、僕は怨念によって引き起こされた頭痛に額を押さえる。

以前に師匠に怨念の中に閉じ込められたときの比ではないが、それでもこの「霧」の中で影響が出ないわけがない。

怨念は普通、生きている人間、つまり肉体のある人間にしか効果がない。

そして、その生きている人間の中で、「怨念をぶつけられた、乗せられた」人間が一番被害を受ける。

これは当然のことだろう。

だが、怨念の中に居て、標的の次に被害を受けるのは「怨念を認識できる」人間なのだそうだ。

これもまた師匠の受け売りであり（本当に何でも知っているんだ、あの人は）僕は自分以外の人間が怨念の中に居てどう感じるのかはもちろん知らないが、自分はその二番目に被害を受ける人間であり、実際多大な影響を受けてしまうので、本当なのではないかと思っ

ている。  
正直に言っ

てしまえば、まずこの部屋から出たいし、それが叶わないのならばここの怨念を全て霧散させてしまいたい。  
だが、さつき中条さんに説明したとおり、今はどちらも叶わないので、僕は耐えるしかないのだ。

『郵便屋！裕二が気が付いたみたいだ！』

「……今、卵粥持って行きます」

中条さんのその声に、僕は額から手はずした。

大丈夫、師匠の特訓しじめに今まで耐えてきたじゃないか。

僕は額の脂汗をぬぐって、怨念の「標的」が居るためさらに霧の濃くなっている隣の部屋へと移動した。

「お気づきですか？材料は勝手に使用させていただきました。

あと、緊急事態でしたので不法侵入させていただきました」

「……誰だ」

僕が近づくと、やつれてはいるが、しっかりと目の開いたその顔がこちらを見てきた。

「どうやら、僕が取り払った分だけは回復しているらしい。

「僕は郵便屋です」

「郵便屋……？」

素っ気無い僕の声と、それを怪訝な顔をしながら聞く裕二さんのやり取りに、中条さんと薫さんが心配そうな表情で僕と彼を見やる。

『なあ、郵便屋……』

そして、これまた心配そうな表情で中条さんが僕に声をかけた。それを無視して、僕は裕二さんに話を続ける。

「実は、今ここに中条亘さんと藤崎薫さんがいらっしやいます」

彼は、呆然と目を見開いた。周りの二人も、驚いたように目を見開いている。

「……ふざけないでくれ」

裕二さんの声は、掠れてはいたが明確な「怒り」がこめられていた。

「ふざけてなんていませんよ。彼らが居なかつたら、僕はここには来ていませんから。」

アパートの場所も中条さんにお伺いしましたし、鍵の在り処と卵粥の作り方は薫さんに教えていただきました」

だが、それには気づかないフリをして飄々と答える。

「中条さんが亡くなられたのはつい5日前、薫さんも同じころでしたね」

「何故そんなことを知っている」

「本人から聞いたからです」

「……」

裕二さんは、思案するように目を閉じた。

僕は、その間に顎を伝う汗をぬぐう。

「……仮に、2人がここに居るとして、何故君はここに来たんだ？」

「2人に貴方を救ってくれと頼まれたからです」

「君は郵便局のアルバイトではないのか？」

「アルバイトではありませんが、僕は一介の郵便屋であることは確かです。」

管轄外だと申し上げたのですが、お2人が聞く耳を持たず、渋々ついてきました」

彼は閉じていた目を開けた。

「……今、2人はそこに居るのか」

「はい」

裕二さんの質問に、僕はうなづく。

また汗が垂れたので、自然な動作でそれをぬぐった。

「2人と、話はできないのか？」

「今は、できません。」

ですが、2人とも裕二さんとは近い人間ですので、場合によってはできるかもしれません。

立場や血縁が近い人間ほど、霊は確認しやすいので」

淡々と答えてから、2人のほうを振り向く。

裕二さんには見えないが、薫さんの目が潤んでいる。

はて、どうしてだろうか、と僕が首をかしげると、彼女の口から答えが出た。

『お兄ちゃん、話せるぐらい元気になってよかった』

そう言っつて涙を流す薫さんに、居心地の悪さを感じたのはどうやら僕だけではなかったようで、中条さんが頭を掻きながら僕に促す。

『……郵便屋、粥が冷めるから、早く食べさせてやれ』

「あ、すみません」

僕は裕二さんに「起きられますか」と確認を取ってから体を起こすのを手伝い、机の上の卵粥を差し出した。

## 郵便屋と怨念(6)

「……………」  
店の鍵を開けて中に入ると、なんだかとてもない疲労感に襲われ、ドアにもたれかかってそのまま座り込んでしまった。

額の汗をもう一度ぬぐい、ふうと大きく息を吐き出す。

「……………なんなんだ、あれ」

僕はポツリと独り言を呟いて、はいつくばったまま畳へと移動した。

頭痛は引かないし、体はだるいし、こんなに疲労したのはいつ以来だろうか。

中条さんと薫さんは、あのまま裕二さんの家に居ることにしたらしく、僕は一人で帰ってきた。

結局「鍵」の応用したものは、かけたままにしていたので、あれ以上に霊がよってくることはないだろうが、それで彼に乗せられ、ぶつけられた「怨念」が消えるわけではない。

ただ、その怨念の主以外からの干渉はなくなる。それだけだ。

それだけでも、彼からしたら大きな変化かもしれないが、原因不明の体調不良はまだ残っている。

それは僕にも言えたことだった。

「……………あー、畜生」

怨念をぶつけられた張本人以外でその影響を受けた人は、大体時間を経つとその頭痛や疲労感は消える。

もちろん生活環境によつてはその体調不良が長引く人もいるが、普通に3食食べ、しっかりと睡眠を取ればすぐに治る代物だ。

だが、生憎と僕は「普通」の生活を送っていない。

食事も睡眠もほぼ取らないに等しい。

だったら食べて眠ればいいじゃないか、と言われると、僕はそうもできない理由がある。

「……久しぶりに行くのかな」

少しぐらい、何の問題もないんじゃないか。「狩」に行ったつて、ずっと言いつけは守って行っていなかっただし、ほんの少しだし……。

そう考えて、僕は思い切り頭を横に振った。

脳内に現れた師匠にも「あれほど言っただろう！」と怒鳴られる。

……完全に弱ってるな、僕。

畳の上で大きく伸びをして、自分自身に苦笑した。

「とにかく、あの怨念をどうにかするしかなさそうだな……」

自分自身に言い聞かせるようにそう呟く。

あれだけの怨念が集まっていれば、近隣の住民にも被害は出ているはずだ。

あれ以上集まったら、大変なことになる。その前に何とかしないと僕にももつと被害が出る。

とりあえず寝ようと布団を手繰り寄せ、まぶたを閉じた。

「こんにちは」

『おー、来たか郵便屋』

疲労感と頭痛を残しながらも午前中に手紙の配達を終え、昼前に裕二さんのアパートに行くと、僕の出迎えをしてくれたのは中条さんだった。

「何か変わった様子は？」

自分が入るためにいったん解いた「鍵」をドアを閉めると同時にかけなおしながら尋ねる。

目の前の彼は肩をすくめて答えた。

『無いな。』

郵便屋のおかげで少しばかり裕二の体調は良くなったし、霊もよってこなくなつた。

逆に言えば、裕二の体調はあれ以上良くなってはいないし、怨念

の主の霊もどこにいるかわからねえままだ』

「まあ、そうでしょうね」

社交辞令程度に尋ねた質問だったため、僕も中条さんと同じように肩をすくめた。

彼は苦笑して、その後、苦笑の笑の部分を消し去った表情で、『それから』と付け足す。

『俺たちの姿は認識されないうち。アイツは今も眠ってて、薫ちゃんはその横にずっといる』

「……そうですか」

それも、まあそんなものだろう、と思ったが言わなかった。

霊が確認できるのは、本当に稀なことだ。

だから、大抵の人が死んで霊になって、生前自分と近しかった人間のそばにずっといるのに、彼らはその姿を認識することはほとんど無い。

けれど、それを言わなかったのは、中条さんがあまりにも苦々しげな表情を浮かべていたからだし、そんなことを伝えたって何にもならないからだ。

「僕はこれから外を見てこようと思うんですけど、中条さんも一緒に一緒にアパートを出ますか？」

だから、そのまま何も伝えることなく次の動きについて提案をする。

『ああ、ここは薫ちゃんに任せて、俺も行く』

中条さんは僕の提案にうなずいて、その旨を薫さんに伝えてから一緒にアパートを出た。

アパートを出て、とりあえず怨念の「跡」を追うことにした。

怨念は、それを乗せた、あるいはぶつけた霊とその対象者を「跡」でつないでいる。つまり、一方の居場所がわかっていれば、その相手の居場所も知ることができるわけだ。

僕は霊が見えるだけで霊を感知する力は持ち合わせていないが、怨念を見ることはできるのでその「跡」も見ることができる。

『なあ、郵便屋』

「何ですか？」

地面をじつと見つめて「跡」を探していた僕に、中条さんは唐突に話しかけてきた。

『……なんで、裕二はこんなに呪われてんだろっな』

「……さあ」

それを知りたいのは僕のほうだったが、彼の目があまりにも悲しそうなので、首を傾げただけにしておく。

どうやら、中条さんにも裕二さんがこんなに怨念を浴びる理由がわからないらしく、『アイツは人から恨まれるようなやつじゃない』と呟いた。

「……前にも申し上げましたが、怨念は人の心の塊です。他人の心は誰にもわかりません。

また、どんな行動がいつ誰を傷つけているかなんて、僕たちにはわかりません。

だから、裕二さんがどんなにいい人だとしても、怨念の対象になる理由はあるはずですよ」

僕のその言葉に、中条さんが黙り込む。僕はただ、と続けた。

「ここまで怨念の対象になる人間は滅多にいません。

そして、中条さんから見て、裕二さんは恨まれるような人間じゃないのなら、理由は他にあるのかもしれない」

彼が顔を上げ、『理由？』と呟く。

『それは何だ？』

「今から、それを調べに行くんです」

それからしばらく、僕らは2人とも何も言わず、ただ「跡」を追って歩き出した。

## 郵便屋と怨念（7）

「……」  
「話を通じない相手って言うのは、ああいつのことを指すのか……」

中条さんの呟きに、僕は無言で縦に首を振った。

『……まるでストーカーだな』

「まるでっていつか、ストーカーですよ」

人の少ない裏道を、2人ともげんまりして通る。

つい先ほど、怨念の「跡」の最新のをたどって行き着いた霊に会ってきた。

怨念持ちとは言え、人間であることに変わりはない。実際、僕は怨念持ちの霊を相手に商売をしたこともある。

だが……。  
「……とにかく、あの怨念は恨みから来たものではないことがわかりました」

『……だな』

強い恋慕は、時として「呪い」へと変化する。

生きている人間ならばストーカーがいい例だ。

『よくよく考えれば、あいつはすごくモテていた……』

中条さんが『高身長で顔も整ってるし、運動も昔からできたし、家族思いで友達のこともちやんと考えてくれるし、勉強も仕事もそつ無くこなすし、少し歌が下手なところはそれはそれで愛嬌があるし……』と呟き始め、僕は途中から若干の癖みが混ざっていることに気づいたが何も言わなかった。

『とにかく、アイツほどの有望な人物なら、モテるのもうなずけるし、ストーカーがいてもおかしくはない』

「……なるほど」

中条さんの力説を聞きながら、僕は思考を巡らせた。

そして、そういえば、と思い当たる。

「……妙なことをお伺いしますが、中条さんって通り魔に刺し殺されたんでしたよね？」

『ああ』

「その犯人って捕まったんですか？」

僕の問いに、彼は少しだけ考えてから呟くように答えた。

『……そういえば、知らねえな』

「知らない？」

眉をひそめて聞き返すと、中条さんはかいつまんで説明を始める。

『ああ、俺が死ぬ前から裕二の体調不良は始まってたしな』

そりゃ、僕が裕二さんを電車で見たのは結構前だし、体調不良がそこから始まっていてもおかしくは無い。

僕は先を促した。

『死んだって気づいて、それからすぐに裕二のところに行って、したら今まで見えなかったすげえ数の霊がアパートに居て驚いて、これが原因なんじゃないかと思って。』

そんで、霊と怨念を知覚できる郵便屋の話聞いて、すぐにあんなのところに行ったから、あんまり気にする余裕無かつたんだよね。最後のほうはからからと笑いながらそう言うので、僕はさらに眉間のしわを濃くする。

『ていうか、何でそんなこと聞くんだった？』

「……いえ」

これは、少し調べたほうがいいのかもしれない。

直感的にそんな気がして、僕は中条さんの質問にきちんと答えることなくきびすを返し、図書館を探した。

『なあ、郵便屋』

「……」

僕の後ろを浮遊しながら話しかけてくる中条さんを無視して（図

書館だから不可抗力だ）僕は新聞をあさる。

『俺を殺した犯人なんかより、裕二のストーリーカー何とかする方法考えようぜ』

6日前の新聞の地方欄に「通り魔殺人、また同一犯の犯行か」の文字を見つける。そして、予感はず信に変わった。

そのまま新聞を片付け、5日前、4日前と新聞をたどっていったが、「犯人逮捕」と言う文字は無い。

それから6日よりもっと前の新聞で「通り魔殺人」の記事を何件も見つけ、僕は気づいた。

裕二さんが危ない。

無言でその場を立ち去り、僕は裕二さんのアパートへと足を進めた。

『おい、どうしたんだよ！』

何がわかったって言うんだ！』

慌てて付いてきた中条さんに聞かれ、僕はできるだけ声を抑えて、だけど確実に返事をした。

「……裕二さんが危ないと言うことが、わかりました。急いでアパートに帰ります」

『裕二が危ない?! どういうことだ!』

血相を変えて僕に問いかける（と言うより怒鳴りかかる）彼に、僕はいつもより数十倍速いペースで歩きながら、質問に質問で答えた。

「中条さん、裕二さんは昔から異性に人気があつたんですよ?」

『ああ……だが、今はそんなことを言っているときでは』

「では、霊以外のストーリーカー被害にあつたこともあるんですよ?」

これは、質問と言うより確認だった。

『……あるが、それがどうかしたのか?』

訝しげに彼は答える。

「……そのときの裕二さんの様子は?」

『気味悪がつてたよ。』

気持ちの悪い手紙やらが届くし、薫ちゃんも凄く怒ってたってアイツがよく言ってた。

裕二が外に出るのもあまりいい顔しないって。またストーカーにあつたらどうするのかって。

兄思いのいい妹だけど、どっちが年上かわかったもんじゃないなって、よく笑ったもんだ」

「やっぱり……」

僕が一人で納得して頷くと、中条さんはいい加減しびれを切らして『何が危ないのかって、聞いてんだよ！ 怨念の霊は寄ってこないようにしたんだろ！』と叫ぶ。

今度こそはぐらかすことなく僕は答えた。

「今、一番危険なのは怨念の主の霊なんかじゃありません。」

薫さんですよ」

『お兄ちゃん起きないなー……』

兄の姿を確認しながら、彼女は微笑む。

『この怨念が消えちゃえば、完璧に二人つきりなのに』

彼女は微笑みながら「黒い霧」を撒き散らし初めて約3時間。

他の怨念とは比べ物にならない「どす黒い」霧が部屋中に充満して、彼女の兄の体力は郵便屋が関与する前よりさらに奪われていた。

『お兄ちゃんと、早くお喋りがしたいのに……』。

このままお兄ちゃんが死んじゃったら、いっぱい喋れるのかな？』

彼女の笑顔は明るい。

まるで周囲の暗さと相反するように。

## 郵便屋と怨念(8)

『……なんだ、あれ』

「……………」

2人で慌ててアパートに向かい、アパートを見上げた瞬間中条さんがそう呟いて絶句した。

『あれが、怨念か……?』

「はい」

裕二さんの部屋の窓から、真つ黒い、と言つよりどす黒い霧が、次から次へとあふれ出ている。

あまりの「怨念」に、普段は知覚できないはずの中条さんにも、その光景が見えたらしく、彼は呆然と5階を見上げていた。

『……これ、薫ちゃんが』

「はい」

彼の言葉には未だ疑いの念が見え隠れしていたが、僕は何のためらいもなく断言する。

中条さんは僕のほうを見て、悲しさと悔しさの入り混じった声で尋ねてきた。

『……俺を刺したのは、本当に薫ちゃんなのか?』

その言葉は、きつと僕の「否」という答えを待っていたのだろう。

「……断言はできません。が、そうであれば辻褃は合います」

けれど、僕は自分の思っていることを正直に答えた。

『女子高生に、殺しなんてできるのか?』

「わかりません。が、できないと断言はできません」

女の子の腕っ節なんて、運動でもしていない限り高が知れている。だが、決して前例がないわけではない。

「……考えている余裕はありません。」

裕二さんが、どれだけ衰弱しているかわかりませんし、薫さんが何をしてくるかもわかりません。

「 怨念持ちの霊は、普通の霊とは違います」

『 ああ、わかった』

中条さんがうなずいたのと同時に、僕は鍵を解いた。

そして、アパートのほうへ歩き出す。

近寄るだけで汗がにじみ始めるような酷い怨念の中で、僕はフー  
ドを深くかぶりなおした。

「……………」

『……………』

思わず絶句してしまうような黒い霧は、部屋の中から次から次へとあふれ出ている。

僕は、深呼吸した後、問答無用でその霧を霧散させ始めた。

怨念に触れる。

消える。

現れる。

近寄る。

消える。

また現れる。

その繰り返しで、ずんずんと部屋の奥へ進んでいく。

進むにつれて僕の額に汗がにじみ始め、前髪が額に張り付いた。

随分と霧散を進め、ようやく目の前が見え始めたとき、

『 どうして来ちゃったの？ 』

という、薫さんの無邪気な声が聞こえた。

中条さんが僕の後ろではっと息を呑んだのがわかる。

目の前にいた薫さんは、確かに微笑んでいたが、それは、どこか歪で。

僕は瞬間的に感じた頭痛に少しうめき声をもらしながら、裕二さんの姿を探した。

『 折角、お兄ちゃんと2人きりになれると思ったのに……………』

そんな僕らを尻目に、彼女は唇を尖らせて『怨念の女を退治してくれるんじゃないか？』と問いかけてくる。

僕らは何も答えず（中条さんは、答えられずの方が近いかもしれない）、ただ黒い霧に覆われた部屋を見渡した。

そして、ベッドに横たわり、完全に意識を失っているらしい裕二さんの姿を見つけ、

『裕二！』

慌てて近づこうとした中条さんに、

『お兄ちゃんに近寄らないで』

冷たい声が降りかかり、彼は反射的に足を止めた。

『この疫病神。あんたのせいでお兄ちゃんがストーカーの被害にあつたんでしょ』

『な……』

昨日まで見ていたあの暖かな声とは大違いの、冷たくて鋭い声に、中条さんが再び絶句する。

「……だから、中条さんを刺したんですか？他のストーカーの女と同じように」

僕は、額の汗をぬぐいながら、何の感情も混ざらない声でそう聞いた。

『ええ』

彼女は、動けなくなっている中条さんから視線をはずし、僕の方を見ながらうなずく。

『お兄ちゃんは、誰にでも優しく顔も良くて、だから、ストーカーの被害にも良くあつた。』

お兄ちゃんに触れる資格なんてなくせに、訳のわからない手紙が郵便受けに入っていたり、気持ちの悪い女がお兄ちゃんのことつけまわしたり』

「……」

彼女の瞳は憎悪に燃えていた。

『お兄ちゃんにそんな思いをさせるなんて、許せない。』

そして、お兄ちゃんのストーカー女は、皆その疫病神と繋がってるやつらだった。

同じ職場の課だったり、学生時代の同級生だったり……。その疫病神とお兄ちゃんが一緒に居るところを見て、お兄ちゃんのこと知ったに違いないの。

だから、刺した。それだけ」

「……」

中条さんは何も言わなかった。

目の前に自分を殺した相手がいて、でも、何もできなくて。彼の瞳に、いろいろな感情が浮かび上がっては消えていく。

まだ生きていたかった。自分が殺されたことに対する理不尽。だけど、ストーカー女を生み出した原因は自分らしい。裕二さんを苦しめたのは自分だったのかもしれない。だけど……。

僕はそんな中条さんを見て、それから薫さんに視線を戻した。

「僕を巻き込んだのは、怨念の女を退治させるためですか？」

そして、完全に裕二さんと2人つきりになるために」

「そうだよ。」

皆死ねばストーカーが居なくなつて、お兄ちゃんと2人つきりになれると思つたのに、お兄ちゃんはそれから訳のわからない体調不良になつてしまつて。

それで、この人刺した後で私も車に轢かれて死んじゃつたけど、それで霊つてやつが見えるようになってよくわかつた。

ストーカー女どもは、死んでも懲りていないって。

だけど、今の私じゃストーカー女はどうにもできない。

そのときに、怨念と幽霊が見える郵便屋さんの話を聞いたの」

彼女はゆるりと微笑んで「怨念が消せるなんてびっくりだったけど、それにも限界があるみたいだね」と言つた。

私のこの思いは、怨念なんかじゃないから消せないでしょ？とも。

## 郵便屋と怨念（9）

『でも、郵便屋さん、何で私が刺したってわかったの？』

薫さんの問いかけは、あくまで無邪気だった。

僕は左手で怨念を霧散しながら答える。

「最初から妙だと思っていたんです。

怨念をぶつけた主は、ほとんどの場合ぶつけた相手のそばに居るんです。

でも、今回は僕が見ただけで怨念をぶつけた八人中一人。そして、その霊もすぐに居なくなってしまった」

理由は簡単。自分を刺した相手が現れたから。

薫さんは何も言わずに僕の話聞いていた。

「つまり彼女たちは薫さんが犯人であることを知っていて、自分を刺した人間が現れたことで裕二さんにも近寄れなくなってしまった。自分に危害を加えたものに近寄りたいと思う物好きは少ない。中条さんが平然としていたのは、自分を殺した相手を知らなかったから。」

そして、新聞に書いてあった犯人像が「若い女」であったので、もしかしてと思ったたら大当たりでしたね」

『そう……』

僕の言葉を聞き終えた彼女は、『でもまあ、犯人死亡でこの事件は終わっちゃったけどね』と笑った。

楽しそうに笑っていた薫さんだが、しばらく笑った後で、でも、と話を続ける。

『郵便屋さんがそれだけのことでわかっちゃうほど優秀なら、もっと早くストーリーカー女どうにかできるんじゃないの？』

幽霊は見えるだけでも、怨念は見えるだけじゃなくて消すこともできるみたいだし。

いくらストーリーカー女の居場所を掴むためだって言っただって、もう

少しお兄ちゃんを怨念から開放してあげられなかったの？

お兄ちゃん、あんなに苦しんでかわいそうだったじゃない』

僕は思わず頭の痛みでよろけそうになった。歯を食いしばってその場にとどまる。

彼女の容赦ない「想い」が僕にぶつかって、額の汗は顎を伝った。

『ま、別にいいよ。』

もうお兄ちゃんはストーカー女の怨念で苦しんだりしてないもん。

お兄ちゃんは、私が救ってあげる』

そのようすを見た彼女は、ふっと視線を自分の兄のほうへ向ける。完全に衰弱しきった裕二さんは、もう呼吸すら怪しいのではないだろうか。

『このまま私の想いでお兄ちゃんが死んでくれたらな……』

そうしたら、私はずっと、お兄ちゃんと一緒に居られる。

彼女はそう言って笑った。

『……るな』

そのとき、「怨念」に塗れたこの部屋に、小さな声が響いた。

『……何か言った？』

薫さんは、一変して冷たい表情をその声の主に向ける。

『ぶざけるな、って言ったんだよ』

中条さんは、もうその表情に怖気づくことなく彼女を睨み返した。

『さつきから聞いてりゃ、裕二のため裕二のためって……結局全部自分のためだろうが！』

ストーカー女たち刺して、俺も刺して、拳句の果てには自分のために裕二も死ね？！

戯言もいい加減にしろ！』

その怒鳴り声に、薫さんは静かに反論した。

『戯言……？ぶざけているのはそっちでしょう？』

私はお兄ちゃんのためにストーカー女を』

『裕二のために、人を殺したって言うのか?! あいつがいつ、そんなことを望んだんだよ!』

中条さんは、今までの緩みきつたふざけた顔からは想像も付かないほど厳しい顔をしている。

思わず、彼女が怯んでしまっぐらい。

『結局、お前が裕二と2人つきりになるのにストーカー女は目障り以外の何者でもなかった。

そしてその原因となった俺も邪魔だった。

結局自分も死んでしまつて、裕二に認識してもらえなくなったから裕二も死ねばいい?!』

人の命なんだと思つてんだよ!』

彼は薫さんに詰め寄つた。

薫さんが反射的にか、一歩分後ろに下がる。

『俺はまだ、やりたいことがあつた。死にたくなつてなかつた! お前が裕二と2人つきりになりたいていう願望と同じように、俺にも、裕二にも、怨念女にも、叶えたい願望があつたんだよ!』

それをお前はつぶして、今まさに裕二の分をつぶそうとしているんだ! それをわかつて言つてんのかよ!』

それは、中条さんの心の叫びだった。

理不尽に殺されてしまった人間の、心からの叫びだった。

『……』

それを聞いた薫さんが、黙り込む。うつむいて、肩を震わせて、

『言いたいことは、それだけ?』

彼女は笑っていた。

『ほんつと、なに言ってるのか全然わかんないよ?』  
けらけらと笑うたびに、怨念の量が増えていく。

『ストーカー女の願いなんて、知ったことじゃないし、あなたは疫病神なんだから、居なくなってる当然。』

それに、お兄ちゃんの願いなんて私は全部把握してるもん。

お兄ちゃんはいつでも私のことを考えてくれてて、いつでも私と一緒に居たいって言うてくれてたし、私が死んじゃったときすっごく泣いてくれたし、いつもいつも優しくして……』

僕には、薫さんの言葉が呪詛にしか聞こえなかった。

ストーカー女の言葉と、彼女の言葉が重なって聞こえる。

『つまり、お兄ちゃんは私と居る時間が一番幸せなんだよ?』

中条さんは、目を見開いて、詰め寄っていた分後退した。

『あーあ、霊にはこの「想いの力」通じないんだ。つまらないの。』

郵便屋さんにはこの後あのストーカー女退治してもらわなきゃいけないだし、倒れてもらっても困るんだけどな……』

彼女の視線が、脂汗を額に浮かべ続ける僕に向いた。

『ねえ、郵便屋さん、早く苦しみから脱したいよね?』

だったらさ、もう、ストーカー女の身元調べとかいいからさ、あの女たちの怨念だけ消してくれない?』

私の想いと混ぜて、すごく鬱陶しいの。ねえ、郵便屋さん?』

ああ、そうだ。

こんなつらい思いをするのはもうたくさんだ。

僕は薫さんの言葉を聞きながらそう思った。

そして、その思いを口に出した。

「……確かに、こんな思いをするのはもうこりこりです」

その言葉に彼女が無邪気に笑う。

『でしょ? だったら』

「でも、」

僕は彼女の言葉をさえぎって続ける。

「貴女だけがいい思いをするのは、どうも自分の信念と食い違う気がするんです」

この部屋から早く出て行くこととするのは、「逃げるな」という師匠の教えに背いている。

この部屋の怨念はそのうち外にも影響を及ぼし始めるから、結局僕自身にも被害が及ぶ。

そして、自分以外の人間に一人勝ちさせることは、僕の信念と食い違っている。

「だから、その提案には乗りません」

僕は、久しぶりに人前でフードを脱いだ。

## 郵便屋と怨念（10）

フードを取り、色素が薄くて茶色い前髪を左右に分けたとたん、目の前の2人が息を呑んだのがわかった。

「なっ……」

「……」

薫さんは何か言おうとして口をあけたまま何も言えず、中条さんは目を見開いて何も言わなかった。

それもそうだろう、とは思ったが、気にしている余裕はない。

一般的な白目と黒目の色が逆転した左目と、粗い縫い目で縫合されて開かない右目。

驚かれるのなんて、日常だし、気味悪がられるのだって、また同じなのだから。

「……さつき薫さんは、僕は幽霊は見えるだけだけど、怨念は消せる、とおっしゃいましたが、それは誤りです」

そして、僕は2人の反応は無視して勝手に話を進める。

「そもそも怨念が死んだ人間の思いの塊であり、霊も人の思いにエネルギーがくっついただけの存在ですから、いわば怨念と言つのは霊の一部でしかありません。」

だから、僕は怨念に干渉することができなのです」

つまり、怨念に干渉できるから霊が見えるわけではない。

僕は、無表情のまま言葉を続けた。

「霊に直接干渉できるから、怨念にも干渉できるんです」

腕を顔の高さまで持ち上げ、人差し指を薫さんのほうへ向ける。

彼女からの怨念の放出は止まっていた。が、僕は自分が今からやるうとしていることを止めようとは思わない。

「貴女の依頼は郵便屋として受けましょう。」

彼女たちの怨念は僕が責任を持って霧散させます。

だから、これは対価です」

それは、紛れもなく自分自身への言い訳だった。

これは、対価。対価だ。

そう言い聞かせて、僕はいつもは「押さえ込んでいる」力を解き放った。

例のアパートの前に救急車が停車するのを確認して、僕はその場を立ち去った。

フードを深く被りなおし、店へ帰る道をただたどる。

『……………』

「……………」

中条さんが、何か言いたそうにこちらを向いているのはわかったが、僕は振り向きもしなかった。

僕は勝手に少しだけ傷ついて、フードのふちをぐつと引っ張った。自分で勝手にフードを脱いで、薫さんを「消した」癖に、そのことで恐れられて傷ついて。

馬鹿みたいだ。ていうか、馬鹿だ。

自嘲気味に小さく笑って、ポケットに手をつっこむ。

『……………おい』

だから、声をかけられたのは本当に驚いた。

「……………何ですか」

驚いたが、僕は振り返らずに足だけ止めた。

おそらく、この目のことと力のこと、聞かれるだけだろう。

中条さんに背中を向けたまま、口元をゆがんで彼の言葉を待つ。

『薫ちゃんを、どうしたんだ?』

ほらみる、僕は中条さんのほうを見ないで、口の端をさらに吊り上げた。

「どうした、とは?」

『……………郵便屋が手を翳したら、薫ちゃん消えたじゃん?』

どこに行ったんだ?』

僕はゆっくりと息を吐き出しながら答える。

「彼女はどこかにいったわけではありません。」

僕が彼女のエネルギー……所謂魂を吸収しただけです」

『吸収？』

彼が首をかしげている様子が目に浮かんだが、やっぱり振り向かずに僕は淡々と答える。

僕の「本当のこと」の一端を、僕は中条さんに伝えた。

「僕は、その生死に関わらず、人の魂を吸収してしまう体質なんです。」

いつもは無理やり抑えているんですけど、緊急事態だったので開放させていただきました」

僕その言葉に、彼は少しだけ考えて質問を返す。

『……じゃあ、薫ちゃんは消えてなくなった、ってことか？』

「はい」

『……』

中条さんが黙り込み、僕も何も言わなかった。

彼はこのまま無言で立ち去るだろう、と決めて、そろそろ歩き出すとしたとき、

『ありがとな』

という中条さんの声が聞こえて、僕は、反射的に後ろを振り返った。

きつと今、酷く間抜けな顔をしているんだろう。

わかってはいたが、他に表情を取り繕えるほど、今の僕は冷静ではなかった。

「え……？」

口をぽかんと開けたまま、これもまた間抜けな声が零れた。

『本当に、感謝している』

中条さんの口が動くのを思わず凝視する。

感謝？何が？誰に？

言葉の意味を理解することができない僕に、中条さんは少しだけ

苦笑した。

それから、僕のそばまで近寄ってきて、『そういう表情なら歳相応なのにな』なんて、余計なことまで呟く。

中条さんは改めて、と言った様子で頭を下げた。

『裕二を助けてくれて、ありがとう。』

薫ちゃんは……正直、自分を殺した人間に同情なんてできないから、正直敵を討ってもらえたような気分だ。

本当にありがとうな』

「……いえ、別に」

他に、返す言葉が見つけれなかった。

別に、裕二さんのためではありません。ましてや中条さんのためでもありません。僕のためです。

いつもだったらそう言っているはずなのに、なぜか僕は中条さんを見上げたまま、それ以上何もいえなかった。

そして、余計なことだけは尋ねていた。

「……僕のこと、気味悪くないんですか？」

『は？』

「いえ、目、とか……」

無意識のうちに尋ねていたから、最後のほうは口ごもってしまっ。……何を聞いているんだ、僕は。

今の質問は忘れてください、と言う前に、目の前の彼はにかつと笑った。

『さつきまで、あんだけ嫌いな空間に居たんだぜ、俺ら。』

そこから開放させてくれたやつを気持ち悪いなんて、思うわけないだろう』

そして、僕の中でその笑顔が、ブイサインと共に、にまっと笑う師匠と重なる。

「……そう、ですか」

それ以上、何もいえなかった。

またのご来店お待ちしています、なんて、なんだか間の抜けたこ

とを返して、僕は歩き出す。

中条さんは『おう、また俺が地上にいる間に邪魔するな!』と言つて、裕二さんに乗せた救急車を追いかけていった。

「……」

ひとり残った僕は、また店に通じる道をたどり始める。

中条さんは、あの気持ち悪い空間に居たから、僕のこととはそうは思わないと言った。

つまり、普段の状態で僕の「目」を見たら、どう思ったのかなんてわからない。

そこまで考えて、僕は思わず苦笑してしまった。

「……何被害妄想してた、僕」

大体、あの状態じゃなきゃこの目も力も解放しなかつただろう。

全てを受け入れてくれる人間なんて居ない。師匠もそう言っていたじゃないか。

「……こういう時、どうしたらいいんだろう」

喜んでいいのか、それとも当たり前のことだと思えばいいのか。

気味悪がられるのがいつものことで、滅多にそうでない物好きは居ないため、僕は自分の心をどう表したらいいのかかわからず、頭を掻いた。

## 郵便屋の師匠(1)

「……」

今日も平和だ。

いつもどおりまばらにやってくる依頼人の手紙を書き、配達に行き、一息ついた昼下がり。

僕は小さく息を吐きながら、口元に笑みを浮かべた。  
今日はなんだか、すごくいい気分だ。

平和な時間、当たり前前の毎日、というのは、こつも充実したものだっただろうかと、改めて実感したような気がする。

畳に寝転がって、昼寝でもしようと思つた布団を頭からかぶった。

「今日も平和だ」

口に出して言うことで、さらにその想いを感じる。

たとえそれが、自分が感じている「嫌な予感」を払拭するためのある種の現実逃避だとしても。

自分の嫌な予感が大抵外れないことを知っているからこそその、現実逃避だとしても。

布団を被りなおし、睡魔に身をゆだねようとまぶたを閉じて、

「……」

僕は瞬間的に飛び起き、ドアに鍵をかけ、それから生死に関わらず人が入れないよう「鍵」をかけた。

その行動に3秒もかけず、僕はシンとしているドアから離れて畳の上に座り、耳をふさぐ。

次の瞬間、

「うおーい！何で鍵かけるんだよ！開けるよー！」

というなんとも近所迷惑な叫び声と共に、ドアを壊れんばかりの勢いで叩く音が響いた。

「2年ぶりの再会なのに冷たいじゃねーか！」

僕は耳を、ふさいで何も聞こえない、と自己暗示をかける。

「お師匠様を敬愛するという意思はないのか愚かなる弟子よ！」

敬愛に値する行動を日ごろからされていたら、僕だって歓迎しますよ！と心の中でつつこみかけて、無視を貫くことを思い出した。

僕がいつまで経っても扉を開けようとしないうちに痺れをきらせたのか、ドアを叩く音が大きくなる。

「ちつくしょー！この金誰が払ってやっていると思っっているんだ！水道代も電気代も、俺が払ってやっているだろう！差し止めることはいつだってできるんだぞ！」

それはただの脅しだ！という僕の心の叫びと共に、「ガシャ」というあっけない音で扉の蝶番が壊れて扉がこちらに倒れてきた。

「全く、最近の若いやつは、年上を敬うことも分らないのか。嘆かわしい」

その先に居たのは、2年前と全く変わらずど派手なアロハシャツに身を包んだご老体で、

「元氣そうじゃねえか、バカ弟子」  
僕を見てにやっと笑う師匠だった。

そのままずかずかとドアの上を通り、師匠は僕の目の前に立った。蛍光ピンクの生地、青のハイビスカスが目に痛いアロハシャツを強調するように僕の前で胸を張る。

「……師匠もお元氣そうですね」

「そりゃあ、お前なんかとは鍛え方が違う」

とりあえず、無難な返答は何か考えた結果行き着いた返しに、師匠はさらに得意げに言った。

年齢的にはまだ中学生で成長期真っ只中の僕とほとんど変わらない（むしろ師匠のほうが少し低い）身長は、2年前より少しだけ僕のほうが高くなったような気がするが、それ以外は何の変化もない。相変わらずの白髪は無造作に輪ゴムで結ばれて、特に日が照っている日でもないのに顔に合わないサイズのサングラスをかけ、服装

に関しては前述の通りだ。

「郵便屋の仕事もすっかりやっているみたいだな。

まあ、2年間の思い出話はこのドア直しながら聞こうじゃないか」  
「……」

僕は師匠が上を歩いたことによってさらに壊れてしまったドアを見つめて、もう一度ため息をついた。

僕が後ろの戸棚から工具を出すのと同時に、師匠がさっきまで僕が座っていた畳に座り込んで「炭酸はないのか！」と叫んでいるが無視することにする。

とりあえずドアを立て、蝶番以外の破損状況を確認した。

師匠が踏んだことにより部分的に陥没してはいるが、大破はしていない。

僕は木製のドアの壊れた蝶番をきちんとはずしてから新しい蝶番を取り付けにかかった。

ドライバーを手にしたところで、

「冷蔵庫にメロンソーダならあったと思いますよ」

と師匠に声をかけた。

瞬間的に師匠は部屋に備え付けられた一人用の小型冷蔵庫に飛びつく。

僕は飲み食いはしないから本当なら冷蔵庫も必要ないのだけれど、「俺がいつ帰ってきててもいいように炭酸飲料は絶対切らすな！」と

言い、冷蔵庫は自分が使っていたそのままで行った師匠の教えを律儀に守ってしまった。

「さすが、俺の弟子だな」

嬉しそうにペットボトルを抱える師匠を見て、僕はようやく思い至る。

どうして、師匠は突然帰ってきたのだろうか？何故、今？

そう尋ねようかと思ったが、この人の行動に何か意味があるとは思えなかった。どうせ気まぐれだろうという考えの下、僕は質問するのを止めてドアを直すことに専念した。

郵便屋の師匠(2) (前書き)

加筆修正しました。

## 郵便屋の師匠(2)

「それで、俺は妙な気配に気づいたわけだ」

「はあ……」

僕はドアを直しながら、メロンソーダを片手に旅の道中の出来事を語る師匠に相槌を打った。

「俺ぐらいの実力者になれば気配の数は簡単に探れるからな。すぐに探ると、ざっと数えて10人は超える霊の気配を察知したんだ」

「そうですね」

自分に酔っている師匠は、僕が適当に返事を返しても気にすることとはなく、独りで盛り上がり始める。

僕が律儀に相槌を打っているのは、相槌が消えると師匠が怒鳴るからだ(相槌の内容は全く聞いていないのに)。

「俺はその場に立ち止まり、出て来い!と格好よく叫んだ!

すると現れたのは8人の霊たち!」

「……10人超えていないじゃないですか」

「しかも、全員怨念を背負ってやがる。厄介な敵だ、と思ったが、それを恐れる俺ではない!」

「そりゃあ、師匠は怨念の影響は全く受けませんからね」

「そいつらは、酷い形相で俺のことを睨みつけながら、怨念をぶつけてきた!」

だが、俺はその攻撃を華麗にかわし、霊に掴みかかって全員投げ倒してやった!」

「まさか生きている人間が死んだ人間に触れるとは、その霊の皆さんも想定外でしょうから、油断していたんでしょうね」

僕の的確な指摘も、師匠の耳には半分以上届いていないのだろう。机に足を乗せて、メロンソーダを振りかざしながら決めポーズのよくなものをする。

「そして俺は言った！お前らなんか、俺の敵じゃないぜ！とな」

「……何か、少し間違っている気がするのですが」

師匠はようやく机から足を下ろし、メロンソーダを一口飲んだ。

「だが、分からないことは、何故あいつらが俺を攻撃してきたか、なんだ」

「……」

心底不思議そうにそういう目の前の「ご老体」に、僕は手を止めてじつとりとした視線を送る。

僕も、死んだら師匠に怨念をぶつけますよ。2年前までの修行

と言つ名の虐待　をお忘れですか？

という意味を込めて送ったその視線だが、師匠が気づくことはなかった。

「俺のような危ない職種の間人は、根がどれだけいいやつでも、誤解されることが多くて困るぜ」

「……」

僕はもう何も言わなかった。

「お前も気をつけるよ？」

郵便屋つて言うのは手紙を書いて運ぶ単純な仕事だが、その代償に頂いているのはほとんどの場合、霊自身のエネルギー、つまり寿命なんだから。

代償にこんなに寿命を持っていかれるのはおかしい、なんて考えるやつが出てきたら、危害が及ぶ可能性だってある」

「分かっていますよ」

師匠の言葉は、半分は本心からの心配のようだったが、もう半分は「ま、お前なら大丈夫だろうけど」というような雰囲気であっていった。

「まあ、「狩」はしていないようだし、お前も進歩したみたいだな」  
「……」

満足げにそういう師匠。

僕は、前回の裕二さんの怨念騒ぎのときと過去2年間でほんの数

回だけ、誘惑に負けそうになったことがあるが、それは言わないで置いた。

「ま、もしまだ「狩」を続けているようだったら、もう一度修行しなおいだけどな」

「……でしょうね」

修行　と書いて苛めと読む　はもうこりこりだ、という気持ち存分に表した「でしょうね」と言う言葉だったが、師匠には伝わらなかつたらしい。

僕は、再び道中の出来事を語りだした師匠に適当な相槌を打ちながら、師匠に初めて会った日を思い出していた。

僕は、逃げ出していた。

灰色の冷たいコンクリートの建物を抜け出して、走っていた。

「はあ……はあ……」

追っ手はないだろう。あれだけ「エネルギー」を吸収されれば1時間も動けまい。

それでも僕は不安だった。開かない右目を手で押さえながら、何度も後ろを振り返る。

走って、走って、ようやく町に出たとき、先ほど頂いた「エネルギー」分の体力は使い果たし、ビルとビルの間隙の狭い隙間にしゃがみこんだ。

入院服、のような水色の簡単な衣服はぼろぼろで、足は靴を履いていなかったため傷だらけ。

夜だというのに星は全く見えず、町はネオンによって照らされている。

そんな町を練り歩く大人や、その大人に反抗する高校生などの若者が、僕なんかには目もくれず歩き去っていく。

僕はまだ動かせる左目を閉じた。

息が荒い。呼吸が苦しい。

「ねえ、坊っちゃん」

突然話しかけられ少し顔を上げると、目の前に中年の男性が立っていた。

「ひよつとして、家出かな？」

それ入院服？ひよつとして病院抜け出してきたの？」

なんだ、こいつ。

なんで、僕に構うんだ。

何も喋らない僕をみて男は首をかしげながら、「警察はどこだつたか……」と呟いた。

そして、僕がその言葉の意味を理解する前に彼は僕の腕を掴んだ。少しだけ息を飲む。

僕は、その行動はこの男性にとって危険であると知っていたが、振り払うつもりは微塵もなかった。

「あ……？」

みるみる内にエネルギーを吸収された男性が倒れる。

僕はいただいたそのエネルギーによって体力を回復させるとまた歩きだした。

否、歩き出そうとした。が、薄暗いビルの隙間から抜け出す前に、

「おい、坊主」

老人に声をかけられ、僕は立ち止まる。

見ると、結構高齢な男性が立っていた。

いくらここが都会の町だといっても、老人が身に付けている派手なアロハシャツと顔のサイズに合っていないサングラスは目立って、というより浮いていた。

「お前、その水色の服……あの研究所から逃げてきたのか」

その言葉にピシリと固まる。

ひよつとして、追っ手だろうかと警戒したが、こんな目立つ老人は研究所にはいなかった気がする。

「そっか……」

老人はそう言うと、顎に手を当てて何か考え、不意に僕の腕を掴

んだ。

「あれ……」

今度声を上げたのは僕だった。

エネルギーを吸収できない。

目の前の老人を見上げると、にやりと笑っていた。

郵便屋の師匠(3)(前書き)

続きが遅くなってしまい、申し訳ありません。

### 郵便屋の師匠(3)

「……」  
僕はおんぼろなアパートを見て、目の前の老人をもう一度見た。

「ここが、俺の家だ」

「……」  
老人は胸を張って僕にそう言ったが、正直に言っただけでいつ壊れてもおかしくないだろう。

しかも、3階建てのこじんまりとしたアパートの上には何人も「死んだ人間」が浮かんでいた。

僕は反射的に顔をしかめたが、老人はそんな僕の表情に気づかないのか、僕の腕を引く。

「さ、遠慮なく入れ」

僕は老人に促されるまま（というより腕をつかまれ半強制的に）アパートの一室に入った。

「ほれ、これを飲め」

部屋に入って促されるまま座布団の上に座る。

足の裏にこびりついた泥と血が畳を汚してしまっているが、目の前に居る老人は気にした様子もない。

そのまま彼は紐を引いて蛍光灯の電気を付け、小型の冷蔵庫からペットボトルを取り出した。

「炭酸は健康の秘訣だ！」

渡されたそれはジンジャーエールで、僕は別にのどが渴いているわけでもなかったが、折角頂いたものなので飲むことにする。

力を入れるとプシュツと音を立て、ペットボトルが開いた。

目の前の老人は既にコーラをがぶがぶと飲んでいて、僕は少しだけ躊躇してからペットボトルに口をつける。

「……っ、げほっごほっ」

久しぶりに口に含んだ炭酸飲料は、口の中が痛くなるほどシュワシュワと泡立っており、思わずむせ返った。

そうして、もともと炭酸はあまり得意ではなかったことを思い出す。

飲み物を飲むのなんて久しぶりで、僕はすっかり忘れてしまっていた。

そのことを思い出すと、「強制的に開かなくされた」右目の存在を思い出し、そして白目と黒目の色が反転した左目のことも漸く思い出した。

僕は慌てて顔を伏せる。

この目が、体質が、異質であることは、施設に入る前から、その中に居たときですら分かっていたことだ。

だから、逃げてきたのだから。

老人は明るくなったこの部屋でも目のことは一切触れてこなかったので、すっかり忘れていた。

「……？」

すっかり忘れていた？

そんな馬鹿な、と僕は愕然とする。今まで片時も忘れたことはなく、忘れることなど許されなかったのに。

そろりと様子を伺うと、老人は二本目のコーラを開けるところで、僕の方を気にする様子はない。

そうだ、彼は研究所のことを知っていたのだ。つまり、僕が異質であったことは知っているのだろう。

しかも、この老人はエネルギーが吸収できなかった。

きっと彼も……。

「おい坊主」

そこまで考えたところで、老人に呼ばれ、反射的に顔を上げた。

老人は、僕のほうなんて見もせず、コーラの成分表示を眺めながら言う。

「お前が今考えていることは分かっている。」

俺に答えられる範囲なら、答えてやる。だから、今は休め。

「ここにおいてやる。」

きょとんとした僕の方を、老人は漸く向いた。

「寝ろ、布団は特別に貸してやる。」

そう言つて老人は箆笥から掛け布団を取り出し、僕に渡した。

僕は、躊躇しながらそれを受け取り、老人に促されるまま横になる。

すると、自分でも思っていた以上に疲れていたのか、そのまま瞼が下がり、それに任せて眠った。

「おい、聞いているのか？」

師匠の言葉にはつとした。

僕は思考の海に沈んでいたらしく、相槌がおろそかになっていたようだ。

返事をしない僕を見て、師匠は大げさなため息をついた。

「全く、師匠不幸な弟子だぜ。」

師匠不幸つて何だ、と思つたが口に出さず、とりあえず「すみません」と謝る。

「折角俺が旅の土産話をしてやっていると言つのに。」

土産話と言うよりは自慢だ、と思つたが口に出さず、とりあえずもう一度「すみません」と謝る。

そうして、ふと師匠がドアを壊して入ってきたときに感じていたことを、僕は何の気なしに尋ねた。

「そういえば、師匠はどうして帰つてこられたのですか？」

「は？」

が、師匠はきょとんとした表情で僕の方を見る。まるで、そんなの愚問だと言われているようだ。

「弟子の顔を久しぶりに見に来たに決まってるだろ。」

「はあ……。」

本当にそんな理由で2年ぶりに帰ってきたのだろうか、と思ったが、面倒だったのでそれ以上尋ねるのは止めた。

元通りになったドアを動かし、きちんとドアの役割をなすことを確認して僕はうなづく。

その様子を見た師匠が、「よっこらしよ」と言いながら腰を上げた。

「ようし、飯食いに行くか」

それは、明らかに僕も一緒に行くことが前提の口調で、

「……師匠だけで行ってきてくださって結構ですよ」

僕はどうせ言っても無駄だろうと思いつながら、一応そう言う。

「そういうなよ、つれねえな」

「どうせ僕は食べないんですし」

「師匠に付き合え、愚かなる弟子よ」

師匠はそう言って、有無を言わず僕の腕を掴んだ。

振り払うこともできず、僕はそのまま外に連れ出される。

……見かけによらない握力も、相変わらずだな。

そんなことを思いながら、後ろを振り返ってきちんと「鍵」をかけた。

## 郵便屋の師匠（４）

「久々にファミレスなんて入ったな」

全国にチェーン店を持つファミリーレストランに入り、師匠は満足そうにそう呟いた。

「師匠ファミレスなんて言葉知ってたんですね」

僕のその呟きは師匠が放った殺気によって散り散りになって消える。

黙った僕を見て、師匠は殺気を放つのを止め、メニューに目を落とした。

僕は何も食べないので、とりあえず店内をぐるりと見やる。

……と、やはり自分たちが悪い意味で目立っていることが良く分かった。

店内の客のほとんどは、僕たちのほうをチラッと見て、すぐに視線をそらすか怪訝な顔をするのだが、若い女性などにいたってはこっちを見たまま笑っている。

「……そりゃ、目立つよなあ」

師匠は今日も元気に青い花が真つ赤なシャツに良く映えたアロハシャツに、膝までのハーフパンツにスニーカー。

とても、こんなご老体がするような格好ではない。

かく言う僕も、灰色でだぼだぼのパーカーを着て、フードで目元まで覆っている。

この格好が「不審者」と呼ばれるものであることは、当の昔に学んでいた。

「よし、ハンバーグドリアとプリンパフェにしよう」

そして、そんなことなど気にも留めない師匠はそう言ってメニューを閉じ、呼び出しボタンを押した。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

店員さんがすぐさまやってきて、笑顔でそう問いかける。

すごいな、こんな不審な2人組にまでこんな笑顔を向けられるのか。そう考えてから、自分と師匠を一周りに自らしていることに気づいて頭を抱えた。

「おい、お前は何を食べる？」

自分の注文を終えた師匠がそう尋ねてくる。

僕が何も食べないことぐらい知っているだろうに。

面倒だったので、「ホットココアで」とだけ口にした。

「ご注文を繰り返させていただきます」

女性店員さんは未だに「営業スマイル」を保ったままで、僕は心から感服する。

注文を復唱した彼女は、そのまま厨房のほうへ消えていく。

「お前もこのくらい笑顔で接客できるようになれ」

師匠がそう言って僕を見たが、僕は苦笑いを浮かべただけだった。

「ま、そうやって笑うようになっただけましか……」

「……」

「最初は本当に笑わない、泣かないやつだったからな。」

俺の今世紀最大のギャグで笑わなかったのなんて、お前ぐらいだ

ぜ

「……」

僕は師匠の呟きに何の反応も示すことなく、ただ、師匠の最高につまらないギャグと共に、昔の記憶を再びよみがえらせていた。

「……」

目が覚めて、むくりと体を起こした。

そして自分が座っている場所が冷たいコンクリートの床でないことに気づく。

働かない頭を使って昨日の記憶を引っ張り出し、そして漸く見ず知らずの老人にここで布団を貸してもらったことを思い出した。

そつえば、あの人はどこだろう？



ケ物化ケ物化ケ物化ケ物化ケ物……！

「ああああああああああああああああああ！！！」

「おい、大丈夫か！」

気が付くと、目の前に居たのはあの老人で、僕の顔をしっかりと覗き込んでいた。

「あ……あああ……」

老人にさえぎられて、もう鏡は見えなかった。

それだからなのか、それとも老人が僕の肩をしっかりと抑えているからなのか、僕は少しだけ落ち着いて、意味のない叫び声は少しずつ止まっていく。

それを確認してか、老人は僕の肩に置いた手を離しながら、ゆっくりとした口調で語りかけてきた。

「ここは、あの研究所じゃない。お前は逃げてきたんだろ」

「あ……」

「大丈夫だ、お前に害を成すやつは、ここには誰も居ない」

「……」

僕は、完全に落ち着きを取り戻し、ゆっくりと息を吐いた。

「……すみません」

小さく謝ると、老人は「気にすんな」とだけ言って、大き目のタオルで鏡を覆う。

鏡が完全に隠れたことを確認してから、老人は付け足すように小さく言った。

「ついでに言うておくと、お前は俺には害を成せないから、そつちのことに關しても安心しろ」

僕の体がピクリとはねる。

老人はその様子を見て、にやつと笑った。

「俺はお前に触れられても何も起きないし、お前みたいなひよろひよろに負けるほど弱くもねえからな」

それだけ言つて老人はシャワー室を出て行き、僕は独り取り残さ

れて呆然としていた。

## 郵便屋の師匠(5)

シャワー室から出て、ふと前を見ると、鏡は大きな布で覆われていた。

先ほどの自分の醜態を思い出して恥ずかしくなる一方で、老人が言った言葉の真意なども気になる。

そして、ふと思い出した。

僕は、あの老人のことを何一つ知らない。

彼が何故僕を助けてくれたのか、何故研究所のことを知っているのか、いったい彼は誰なのか。

用意されていたタオルで髪の毛を拭きながら、ぐるぐるとそんな疑問が頭を駆け巡る。

……というか、まだきちんとお礼も言っていないのではないか？  
僕ははっとして、早く着替えてお礼を言わなくてはと足元に目をやる。

タオルのあった場所の横に、少しだけよれよれになったスウェットが置かれていた。

正直、あのど派手なアロハシャツが置いてあったらどうしようか  
と思っていた僕は、少しだけ安心して、それらを身に着け、老人の下へ駆けた。

「おう、ちょうどいいサイズじゃねえか」

老人は、スウェットを着た僕を見て、満足げにうなずく。

「俺の親友の息子が来ていたやつ処分を任されていたんだが、面倒で筆筒に入れっぱなしだったんだよな」

「はあ……」

この老人の親友、と言うものを思い浮かべようとしたが、アロハシャツを着た老人が笑っている姿しか思い浮かばなかったので、僕は思考を止めた。

「そんで、お前俺に言いたいことや聞きたいことがあるんだろ」  
そんな僕に、老人はまるで全て分かっているぞというような口調で言う。

僕は座り込んでいる老人の前に座って、頭を下げた。

「助けてもらってありがとうございます」

「まあ、気にするな。研究所出身者の好ってやつだ」

手をひらひら振りながら平然と答えた老人の言葉に、僕は愕然とする。

「……研究所出身、なんですか？」

「ああ、そのことも伝えていなかったっけか？」

老人の言葉に、僕は目を丸くしたままうなずく。

「お前もあそこに居たなら分かるだろうが、あの研究所は“異端”を取り扱う場所だろ？」

「……はい」

僕は、あの研究所という忌々しい場所のことを思い出した。

その研究所は、医療・薬品開発を名目とした人体実験施設だ。現代の社会にそんなものがあるものか、と馬鹿にするかもしれない。いい。

信じられなくたって、それは事実なのだから。

それに、“異端”な人間であるか、研究所の研究者にならない限り、その場所と関わり合いになることはないと言言できる。

だから、知っている人間はほとんど居ないのだ。

僕は、小学生になる寸前にそこに放り込まれた。

物心付いたときから父親は居らず、ただし、僕の第一の異端な点である「記憶力」で、父親と呼ばれる存在の顔は完璧に記憶していた。

記憶しているのは顔だけで、何故彼が出て行ったのかについては、分からないままだが。

そして、彼女はたった一人で僕を育てた。

目の色が人と違ったって、この子は私の息子よ。

そう言っつて、彼女は僕に愛情を注いでくれていた。

……というのは、錯覚であったと言うことを、僕は身をもって知った。

ある日、気が付くと、あの研究所に居た。

彼女が居ないことで泣き叫んだが、それもはじめのほうだけだった。

僕は研究員の言葉から、彼女に捨てられたのだと言うことを知った。

最後に見た彼女の顔は、家を出て行く父親と呼ばれる存在と同じ顔をしていた。

僕は、彼女に会うことをあきらめた。

年齢はまだ6歳だったが、僕はあらゆることを知りすぎていた。

冷たいコンクリートの床に、簡易なベッドと水色に統一された衣服。

食事はそれでも一般的なものが毎日支給されていた。

が、僕はその食事に手を付けたことはなかった。

僕の周りに居るのは、僕と同じ“異端児”と、貧困に苦しむ家の子供だけだった。

異端児、という特殊な体質の子供は、その力の使い方を毎日学び、研究員がその観察をする。

外見が特殊な子供も、また然りだ。

肌の色に変化はないか、瞳の色は変わらないか、研究員が毎日その観察をして、けれども後の時間は全く自由時間だった。

けれども、“異端”の中に居る“普通”の子は違った。

彼らは、特別にするように決められたこともなく、自由であったが、気が付くと誰かが居なくなり、そして居なくなった誰かが居た

場所に、別の誰かが現れていた。

僕はそれを気にしたことはなかった。

あるとき誰かが、居なくなつた子はどこへ行ったのか、と尋ねた。研究員は、彼らは「家族のところへ帰つたのだ」といつていた。

僕は自分には家族は居ないのだと、その言葉すら気にしたことはなかった。

生にしがみついていたわけでもなく、かといって死にたいわけでもなかった。

あの研究所ですら、自分は異端であつたが、そのことを気にしたこともなかった。

何も食へなくても、寝なくても、ただ毎日は過ぎ去っていく。

そんな僕は、あの時はまだ、決して生きたいわけではなかった。

「おい、大丈夫か？」

「……っ！」

目の前に老人の顔があり、驚いて身を引く。

と、そこで自分がぼんやりと考え事に没頭してしまっていたことに気づいた。

「すみません」

「ま、あそこから出てきてまだ1日だし、疲れもまだあるんだろ」  
頭を下げた僕に、老人はまた手をひらひらと振った。

「で、俺があ研究所の出身だつてのは……まあ、言ってみればお前と同じだ」

「……脱走した、つてことですか」

僕の言葉に、老人はうなづく。

「それで、今は郵便屋を生業にしてる」

「……郵便屋？」

老人が続けた言葉に、僕は首をかしげた。

郵便屋の師匠(5)(後書き)

誤字脱字などありましたら、ご指摘いただけると幸いです。

郵便屋の師匠(6)(前書き)

遅くなって申し訳ありません。

## 郵便屋の師匠(6)

「うまい！」

ハンバーグドリアを食べながら師匠が叫ぶ。

僕は無言でホットココアを口に含みかけて、思わず「あちっ」と口を離した。

「猫舌は変わらねえな」

「……そんな簡単に変わるものじゃないですよ」

「だいたい、普段は何も食べないんだし。」

僕の言外の主張を読み取ったようで、師匠は「ひひひ」と笑った。「郵便屋の稼ぎだけで足りてるみたいだな」

「……何度も言いますが、狩はしてませんからね」

僕は目を細めながらももう一度言い直す。

「疑ってねえよ。疑ってたらお前の顔を見た瞬間殴ってる」

「……」

師匠はハンバーグをフォークで切りながら僕の方も見ないで答えた。

まあ、確かに師匠がそんな情けをかけてくれるはずがない。

僕は師匠が確かにわかってくれているのだと理解し、ココアを冷まして再び口に入れた。

「お前も最初は、郵便屋をなんなのか全く理解してなかったのにな。修行も文句ばかり言っていただろ」

「……そうですね」

あっけらかんと言ってくれる師匠に、僕は「……」で「文句じゃなくてまっとうな主張だ」という思いを込めたが、目の前のご老体には届かなかつたらしい。

「わざわざ大量の怨念集めてきたり、競馬の過去の統計を調べてきたり、大変だったんだよな」

「……そうですね」

感謝しろよと言わんばかりの師匠に、僕は「……………」で「そんなに大変ならあんな修行という名のいじめはやめてくれ」という思いを込めたが、目の前のご老体には届かなかっただらしい。

ハンバーグドリアとプリンパフェを交互に食べるといって、見ていられるだけで気分が悪くなりそうな食べ方で食べ進めていく師匠を見て、僕はこっそりため息をついた。

「さあ、この中へ飛び込め！」

「無茶ですよ！」

「無茶じゃねえ！俺に何の害もないのなら、お前にも害はない！」

「師匠はそういう体質なんでしょう！」

「いいから飛び込め！」

「僕を殺す気ですか！」

あの老人……師匠に拾われてから、2か月が経過した。

僕は師匠に遠慮することをやめ、師匠も無茶を言い出すようになった。

そして、僕の「力」を抑え込む修行という名のいじめは、毎日続く。

今日も、師匠はどこから連れてきたのか、怨念もちの霊を大量に連れてきて、僕をその真っ黒い霧の中に飛び込めと背中を押ししてきた。

師匠の狭いアパートの中、ひしめき合う霊たちで既に気分が悪いというのに、その中に飛び込むのなんて僕を半殺しにしたいに違いない。

「いいから、早く飛び込めよ！」

「うわっ！」

既に額に汗を浮かべながら後ろに下がる僕に、ついに我慢が出来なくなつた師匠は僕の背中を勢いよく押し、僕は怨念の中に突き飛ばされた。

途端に強い頭痛に襲われ、うずくまる僕をしり目に、師匠はアパートのドアを開ける。

「じゃ、1時間したら帰るから、頑張れ。霊を消すのは無しだからな」

「ちよつと、師匠……！」

1時間これに耐えるぞ？！

そう叫ぶより早く、師匠はすでにアパートの外。

追って外に出ようとしたが、頭がくらりとして動くことがかなわなくなってしまうた。

僕は右手を振って怨念を振り払う。触れられるものが触れると、怨念の黒い霧はあつという間に霧散する。

少しだけ薄くなった霧にほつとしたのもつかの間だった。

四方を囲む霊から、次々と怨念があふれ出て、すぐに頭痛はぶり返してくる。

「なんで、霊消したら駄目なんだよ……！」

僕以外は「生きた」人間がいない部屋に、僕の声が響く。

手を振りかざして怨念を霧散させ、霊のエネルギーを吸収してしまえば終わるといふのにそれも出来ずに頭痛と吐き気に耐える。

ちらりと時計を見やると、先ほどからまだ3分しか経過していない。

この終わりの見えない修行

という名のいじめ

はまだ

始まったばかりだ。

「おい、大丈夫か？」

「……大丈夫に見えるんですか」

床に倒れこんで額に脂汗をかいた僕を見下ろす師匠の顔をきつと睨みつける。

約束の1時間に38分遅刻して、師匠はようやくアパートに帰ってきた。

「ちゃんと言いつけは守ったんだな」

「……守らなかつたら、何されるかわからないじゃないですか」  
僕はこの2か月で得た教訓を口にする。

師匠は満足げにうなずいて、未だに怨念を吐き出し続けている霊を見やった。

そして、そのまま霊たちの腕を引いて、外に出る。

僕は怨念の無くなった部屋で大きく息を吐き出した。

無音のアパートの一室に、僕の荒い息の音だけが響く。師匠が外で霊たちに話しかけているのが聞こえた。

「おう……そんなに恨んでやるなよ……え？……うん」

あの、怨念もちの霊たちと会話ができる師匠の意味が分からない。僕は息を整えながら、痛む頭を押さえる。

あんな、一方的な「恨み」を吐き出すだけの「感情の塊」と、ともに会話ができるはずがないではないか。

「……すまん」

師匠の謝罪の声が聞こえた。それによって、僕は師匠が「最終手段」に出たことを知る。

ドアが開いて、師匠が中に入ってくる。

「やっぱり、全員と話をするのは無理があるよな」

頭をかきながら、師匠は僕の前に座り込んだ。

すぐそばの冷蔵庫からサイダーを取り出し、キャップを開ける。

「……なんで、怨念もちの霊と話そうとするのか、って聞きたいのか？」

「……はい」

僕の視線に気づいたのか、師匠はサイダーを飲みながら尋ねてきたので素直にうなずいた。

師匠はため息をついて、相変わらず床に這いつくばったままの僕に目を向ける。

「あのな、あいつらも人間なんだぜ？」

「……」

「死んだら、そいつらは化け物になるのか？違うだろ。」

確かに、お前も俺も霊を消しまう方法を持っているよな。

「ただ、話も聞かずにそいつの存在を消しまうのは、それは人間を殺しているのと同じなんだよ」

「……」

「……研究所で殺されかけたお前には、わかるだろ。死ぬのは怖い。死んだ人間だとしても、やっぱり消えるのは怖いんだ。もう一度死ぬようなものなんだから。」

俺たちがやっていることは、死んだあとの寿命を削り取っているだけなんだよ」

師匠はそういって、大きく息を吐いた。

「ま、お前は他の人間からエネルギーをもらわないと生きられないわけだから、前から言っているように、全部奪わないで少しずつもらうようにしなくちゃならねえ。」

「わかったら、修行に励みな」

「……はい」

僕は、師匠に出会って2か月で、初めて修行を頑張ろうと思った。

## 郵便屋の師匠（7）

ファミリールレストランで昼食をとった僕たちは、特別寄るところもないのでそのまま店に帰った。

師匠は帰って早々冷蔵庫からレモンスカッシュを取り出してふたを開ける。

そして、一口飲んでから思い出したように言った。

「そういえば、お前県外の郵便物あるだろ。」

俺が届けてやるから出せ。切手代が勿体ねえ」

「ああ、すみません」

僕は、白い箱にしまわれている、自分の足では配達できない手紙を師匠に渡した。

普段は、このような手紙は青い封筒の上から茶封筒に入れ、「正規」の切手を張り、「正規」の郵便ポストに入れるようにしている。師匠が真っ赤なウエストポーチにそれらの手紙を押し込んだのを見て、ふと、僕は尋ねた。

「……師匠、もう出発するんですか？」

「ああ、人気者って言うのは忙しいんだよ」

僕は「人気者」と言う言葉は黙殺して、ちらりと時計を確認する。まだ、師匠がドアを蹴破ってから半日も経過していないのに。

レモンスカッシュを一気に飲み干し、口元をぬぐった師匠は、空のペットボトルを僕に渡して腰を上げた。

「じゃあ、また気が向いたら帰るな」

「はあ……。次はどこに行くんですか？」

僕が尋ねると、師匠は顎に手をやって少し考えるそぶりをした後、「海外つてのもいいかな、と思っただ」と答えてにやっと笑った。

「……海外に行くにはパスポートが必要なんですよ？」

「……俺だって、それぐらい知ってる」

あきれたような僕の顔に、師匠がいらだったように口元を引きつらせる。

「そうですか、それはすみません。」

何をしておられるのかは知りませんが、気をつけてください。

もつご高齢なんですからね」

「嘗めるなよ。俺はあと100年は生きるんだからな」

「……」

それじゃあ、本物の化物じゃないか、と思ったことは口に出さず、僕は「じゃあな！」と叫んだ師匠に「いつてらっしゃい」と声をかけた。

ドアが閉まる音がして、とたんにいつもの静寂が帰ってくる。

僕は空のペットボトルをぎゅっと握った。

「……」

いつもどおりの光景のはずなのに、なんだか少しだけ寂しくて、僕は自分自身に苦笑する。

なんだかんだ、僕のことを一番理解してくれてるのは、やっぱり師匠で。

かつての修行　　という名の苛め　　がどれだけつらくても、師匠自身を思い出したいくない存在と定義していても、やっぱり、自分自身を理解してもらえるのは、自分で思っていたよりもずっと嬉しいことのようにだ。

「……次は、いつ帰ってくるつもりなのかな」

そう呟いて、自然と口元が上がる。

また、炭酸補充し解かないとな、と僕は師匠から渡されている「生活費」を手に取った。

「……思ったより元気そうじゃねえか」

老人はそう呟いて、狭い路地の奥に見える建物を振り返る。

かつて、自分が仕事場としていた場所であり、今は弟子の仕事場となっている場所だ。

赤いウエストポーチからサングラスを取り出した老人は、それをかけて人ごみにまぎれた。

誰もが彼の奇抜な格好に一瞬視線を向けるが、関わらないが吉とばかりにすぐに視線をそむける。

死んだ人間も、老人に恨みがある怨念持ち以外は、皆一様にそうしていた。

「そりゃ、俺はどっち付かずだしなあ……」

その様子を見てこっそりと呟き、老人は苦笑した。

彼は死んだ人間に触れることができる。怨念の影響も全く受けない。

それだけ見れば、老人は「死んだ」人間に該当するが、しかし彼の心臓はまだ止まっていない。

理由も原因も分からないが、彼は昔から「どっちつかず」の人間だった。

ゆえに、生きている人間からも死んだ人間からも疎まれた。

それは、彼の唯一の弟子も同じだった。

他者のエネルギーを奪うことでしか、生きることができない老人の弟子は、周囲の人間から「化物」だと呼ばれ続け、老人に出会うまで、誰も信じようとはしていなかった。

「俺も、昔はあんな顔していたんだろうな」

老人とその弟子がかつて住んでいたアパートは、老人が郵便屋の仕事で弟子に押し付けた、調度あのところ取り壊されてしまい、今はもうない。

その場所には新しいマンションが建っていて、面影すらなかった。老人は、そのことを少しだけ寂しく思っている。そして、寂しいと自覚すると、「俺も歳をとったものだな」と自嘲するのだった。

「それにしてもあいつ……この間力を解放したのを察知したからや

ってきたのに、飄々としてんじゃねえか」

老人はそう口の中で呟いて、口元にやわらかい笑みを浮かべる。

「なんか思いつめたか、また狩でも始めたかと思ったが……違うみてえだな」

弟子は、郵便屋の職務を全うし、狩をしていないという言葉も嘘には感じられなかった。

老人がその弟子とであった直後は、「狩」と称して2、3日に1回夜中に徘徊し、生きている人間でも死んだ人間でもかまわず、相手が死んだり、消えたりしない限界のエネルギーを奪って回っていた。

気づいた老人がそれをしかりつけ、修行を厳しくしたところ、弟子はそれを止めたが、修行が終了してからまだ2年しか経っていない。

また、逆戻りしていてもおかしくはない。そう思っつて、慌てて帰ってきたのだが、完全に杞憂だった。

弟子は、老人が思っていた以上に成長していた。

こちら辺の死者たちの間で、郵便屋のことはもっぱらの噂になっている。

彼ら曰く、『親切な郵便屋さん』であると。

老人はそのことを嬉しく、一方で寂しく思いながら、歩を進める。

「あ、競馬の統計取ってもらうの忘れてた」

そして、思い出したように呟いて、少しだけ悔しがった。

郵便屋の師匠(7) (後書き)

郵便屋の師匠はこれで終了です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4472x/>

---

郵便屋 -死者の声届けます-

2012年1月14日14時56分発行